

---

# 男装の令嬢

kokusou.

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

男装の令嬢

### 【Nコード】

N0772T

### 【作者名】

kokusou.

### 【あらすじ】

女性が好きだと豪語する、非同性愛者の男装の伯爵令嬢ルナデア。

超実力派な家に生まれた彼女は、社交界から身を隠し、日々男装して城下に行くのが趣味だった。権力？そんなの興味ない。やられたら、やりかえせ。女に手をあげるやつには制裁を！そんな彼女と国王は、なぜか闘技場で出会った。

「ルナデア、気に入った！僕の妻になってくれ」

「絶対にお断りします。いやです」

主人公・その近辺キャラは全体的にチートの強さです。

一応いろいろ指定していますが、それほどにはならない…予定。  
只今舞踏会編進行中。

## 登場人物（ネタバレ若干含む）（前書き）

いろいろとキャラがでてきましたので、簡潔にまとめました。

今後も追加していく予定です。

今までの話の内容も含みます。未読の方はご注意ください。

また最後に数人のキャラデザを掲載しております。

小説内でのキャラクターのイメージを損なう危険がありますので、  
不必要ならば未表示としていただくことをお勧めいたします。

ちなみに掲載前に書いた落書きですので、クオリティはお求めにならないでください。泣きます。

## 登場人物（ネタバレ若干含む）

ルナディア・ドルトナンド

主人公。

男装が趣味。貴族社会を訳あって毛嫌いしている。なので、未だにデビュタントをしていない。

作中にて闘技場にて優勝。剣技が得意。暗殺術もほぼ会得している。現時点ではドルトナンド家の中でも女であっても最強クラス。

曾祖父にそっくりと言われるほど、女性を守ることを信条としている。

銀髪。碧の瞳。

レーナルト・シュナンベルム

国王。

闘技場にて優勝経験あり。執務はあまり好きではない。なぜかルナディアに懸想している。作中にて一度プロポーズしているが、逃げられており、ただいま画策の真っ最中。  
黒髪、紫の瞳。

ルイザス・ドルトナンド

ドルトナンド家長男。

近衛兵筆頭。隊長格。シスコン。レーナルトとは腐れ縁ともいうべき間柄。レーナルトにルディは渡さないと宣言している。

銀髪、碧の瞳。

ジムナス・ドルトナンド

ドルトナンド家家長。ルナディアの父。のほほんとしている。しかしなんだかんだしっかりしている模様。笑顔の裏には何か隠し持っているような人物。

銀髪、紫の瞳。

ステイルルナ・ドルトナンド

ドルトナンド婦人。夫にとは違い苛烈なところがある。暗殺術が得意。現在本家でその存在に逆らえるものはいない。  
燈色の髪、碧の瞳。

ジエステイナ・ドルトナンド

ドルトナンド家長女。

既婚者。舞踏会に呼ばれた。ドルトナンド家で花形を背負う女性。  
ルナディアの代わりに社交界で目立ちまくっている模様。

ジルディン・ドルトナンド

未出場。出てくるかも未定。

ファルナール

情報屋。店を経営している。多くの謎と情報を持っており、他人の弱みを握っている。ルナディアのことは大切に思っているらしく、頼まれれば協力する。

妖艶美女。黒髪、紅い瞳。

トウーランド

ドルトナンド家執事。作中筆頭苦勞人。若くして今の職に就いているものの、本人はすでに疲労困憊。何か秘密にしたいことがあり、それをファルナールに握られている模様。

テルミア・ハツケンベルド

没落貴族ハツケンベルド家長女。盗まれた母のブローチを求めて王都に来たところ、ルナディアに助けられる。現在はステイールナ伯爵夫人の下で謎の特訓中。栗毛、琥珀の瞳。

ティグエスト・ハツケンベルド

没落貴族ハツケンベルド家長男。テルミアの兄。妹を追って王都へ。闘技場にてルナディアと面識あり。棒術を使う。現在ステイールナ伯爵夫人の下で謎の特訓中。栗毛、琥珀の瞳（黒眼の部分が大きいらしい）。

ハバーニール・オレット

現宰相の息子。

闘技場にてバーデールドに敗れるものの、剣の腕は相当。昔は騎士団を希望していた。整っている容貌だが、ルナディアに言わせれば蛇のような瞳をしているらしい。

紅の髪。

オレット宰相

現宰相。顔の筋肉が未発達の様。ルナディアに対し何か思う所があるようである。

バーデルド・カルカン

現將軍。ダンディ。闘技場にて準優勝。ルナディアの正体を知らない。大刃の両手剣を使う。

エルルマリア・マルティギーニ

マルティギーニ侯爵家長女。自分の容姿や地位に絶対の自信をもっている。ルナディアに対し、何か思う所があるようである。  
金髪、少しくすんだ紅の瞳。

ダヴァンスイナ

子爵の娘。エルルマリアの取り巻き二強の一人。

アパパネ

伯爵の娘。エルルマリアの取り巻き二強の一人。

近衛兵たち

苦勞人。いつも王と隊長に振り回されている。  
名前はまだない。

以下キャラデザとなります。  
ご注意ください。

>  
1  
2  
9  
3  
2  
2  
|  
3  
7  
7  
3  
<

令嬢、趣味に走る（前書き）

初投稿です。つたない文ですが、よろしくおねがいします。

## 令嬢、趣味に走る

コンコン、と控えめなノックの音が響く。それなりに豪華な扉の前で待つことしばし。

その部屋の主からの返事がないことに執事は眉をしかめ、次いで慌ててドアと開け放った。足早に部屋へと入り、辺りを見回す。

そこにいる筈の主の姿はなく、案の定というべきか、執務机の上に書置きとみられる紙を見つける。

足音もよろしく机に近づき、ひったくる様にしてそれを机から奪い取った。

そこには、丁寧な細い字でこう記されていた。

「退屈過ぎる為、しばし遊んでまいります」

「ま、ま、またですかあ——！！！！」

ドルトナンド伯爵家に、今日も真面目な執事の絶叫が響き渡った。

ああ、清々しい！

屋敷で執事にやらされていた座学から逃げ出したルディは、その自由を噛みしめるように思いつきり伸びをした。

今いる城下に目を向ければ、大声で客を呼び込む店の主人、それぞれの店の看板娘の巧みな客引き、大柄な奥さんのその手腕を振るう姿にと、随分賑やかである。

それらの城下の喧騒はその国の活気さを表しているようで、ルディの胸はどこかほっこりした。

この国でも上位に入る伯爵家の一員として、この国が栄えるのは嬉しいことである。

人の波を縫うように進んでいると、後ろから自身の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「ルディさま！今日はどちらへ？」

声が出た方に顔を向ければ、パン屋の看板娘のアルナが頬を染めてこちらを見ていた。

心なしか息も上がっているようだ。慌てて出てきたのだろうか。

店は君の後方10メートル付近に見えているけど、店番はいいのかな？と内心首を捻りながらも、ルディは彼女の表情を見て、花も恥じらうお年頃か、可愛らしいなあと思う。

城下に来ると、このように可愛らしいお嬢様方に会える。

それは始終むっつりした顔の執事に会うことよりも、ルデイにとつては数十倍重要な事だった。

生粋の騎士の一家であるドルトナンド伯爵家育ったルデイにとって女性を守ることは当たり前であった。

弱きものを守る、その力があるならば、それは惜しまずにその為に振るうべきである。

生粋の女好きである曾祖父からの教えである。それは今や家訓となり、今現在も引き継がれている。

その曾祖父の血が混じっているせい、ルデイも大変女性が好きであった。

ルデイが輝くような微笑を浮かべると、アルナは更に頬を染めた。

「御機嫌よう、レディ。残念ですが、用があるわけではないのです。今日はただの散歩ですから」

「まあ、じゃあうちに寄って行ってくださいな！」

恥じらいながらも押し押しのこの態度。女性だから許せる。女性だから可愛い。男性がやったら・・・はっ。

心の中では冷笑を浮かべながらも、それをルデイは表面に見せない。

「申し出だけ有り難くいただきます」

にっこりと笑ってそれだけを返す。

アルナはそれを見て「残念です・・・」と呟きながらも惚けたような顔になっている。

ルデイは腰まであるのだろう銀髪を三つ編みにして垂らし、少しだぼついたシャツに、ぴったりした黒のズボン、華奢な体に合わせ、レイピアとソードブレイカーに近いドルトナンド家特注の短剣とを帯刀している。

要するに彼女は二刀流だ。

人がひしめき合う街中で剣を帯刀するのは、騎士や中流階級以上またはその必要のある者のみ、というのが暗黙のルールであったが、ルデイの容姿ならばその三番目の理由に十分当てはまると一目でわかるだろう。

もちろん中流階級以上というのにも当てはまるのだが、それはお忍びで行動するに当たって不便なので城下の大体の知り合いには隠している。

ルデイは細い線ながらも引き締まった中世的な顔も相まって、なよなよした雰囲気はなく、まさに美形と呼ぶに相応しかった。

どこぞの王子や王のように豪華な服を着ているわけではなく、兄のおさがりだというシャツを着ていようとも、ルデイからは凡人にはないオーラがただ漏れだった。

それに拍車をかけるのはルデイの碧色の目だろう。

そのどこか神秘的なオーラと容姿に絆される女性は、後を絶たない。

そして彼、いや彼女はそれを喜んでい。伯爵令嬢、ルナディア・ドルトナンドは。

ただし彼女は同性愛者というわけではない。

女性を守ることを信条としてはいるが、女性と付き合いたいだとか、アレコレしたいとはこれっぽっちも思わなかった。

ただ単純に女性を愛で、守ることに喜びを覚える。彼女は一風変わった伯爵令嬢だった。

普通ならば伯爵令嬢が剣を嗜むだとか、男装をして街をうろつくのは全く褒められたことではない所か、醜聞である。

それに関して言えば、ドルトナンド家は特殊な家だった。

家系全体にわたり、男性は勿論女性でさえもドルトナンド家に代々伝わる剣術と拳法を習得していた。

女性でいえば正確には護身用拳法が主であり、剣術は嗜まないが、何セルナディアには才能があったというしかない。

とりあえず、ドルトナンド伯爵家はとんでもなく特殊な家なのだ。さすがは実力だけで駆け上ってきた家である。

曾祖父の戦場を駆け抜けた逸話は今なお有名だ。彼はドルトナンド家内でも特殊な人物であった。

その血をまるで先祖返りの如く、濃く受け取ったとしかいいようがないルデイも特殊な人物である。

本人にはその自覚が皆無ではあったが。

そしてそのドルトナンド家の特殊さは、王家公認なのだから仕方がない。

しかも家系は天才筋とでも言うのだろうか。才能もあり、剣術と拳法を習得するだけの根性も体力もある。少々の貴族内いびりには負けたりしない。

それどころか虎視眈々と復讐を誓う始末だろう。

それ故に、今や王家だけでなく、貴族公認の一風変わった伯爵家となった。

それがドルトナンド家だ。

その次女として生まれたルデイは、長女に社交界への対応を丸投げし、自分は体が弱いと嘘を吐き、こうして伯爵家の事務の傍ら、男装をしてお忍びで城下へ遊びに来るのが趣味だった。

アルナと別れ、何気なく大通りから路地へと彼女は足を向けた。丁度近くに以前顔見知りになった女性がやっている店があることを思い出したのだ。

彼女の手製のお菓子はなかなか近所でも好評で、気難しい執事の機嫌取りにも一つ土産に、と思つての行動だった。

少し近道するつもりで入った路地裏で、まさか将来に大きく関わる事件が起きるとは思いもしなかった。

令嬢、趣味に走る（後書き）

ありがとうございました。

令嬢、少女を助ける(前書き)

一話です。よろしくお願ひします。

## 令嬢、少女を助ける

小さな悲鳴が聞こえた。

必死に追いつがる声だ。

「待ってください！お願いですから、返して！」

女の子の声・・・そう判断すると、彼女は自然と行くつもりとは反対の方へ走りだした。

道幅二メートル程の道には、狭苦しくごちゃごちゃといろいろなものが積み上げられており、道幅は半分程度だ。荷物の間を縫うように彼女は走る。

「うるせえな、この餓鬼！黙っとけよ！」

ばしん、と痛々しい高い音が響いた時、彼女はちょうど突き当たった角を曲がり、その現場に遭遇した。

少女が頬を抑えて石造りの冷たい道に蹲っている。その前には今しがたその背を向けたのだろう大柄な男が、悠々と歩いて行くところだった。

どちらに加勢するか、それは彼女にとってあまりに単純な問いだった。

「待ちなさい、その男」

おつとと、女言葉になりかけた。声が怒りで低くなったのが救いだ。

一応格好は男。ならば心まで男になりきる。

怪訝な顔で振り向いた男に、底冷えするような笑顔を向けた。

男だけでなく、少女も行き成り現れた自分に驚いているようで、こちらにはつと顔を向けた。その頬が赤くなっているのルディは視界の端に確認する。

この瞬間に、こいつは男の中でも最も許せない下種であることが彼女の中で決定した。

「・・・彼女に何を？」

「なんだい、アンタ。随分な美形だな。どこぞの騎士様か？ん？」

騎士気どりか、と両手を広げて肩を竦める男は、線の細い自分を見て完全に油断しているようだ。

近づいてみなければ分からないが、相手はかなり大柄で、自分と頭三つ分ほど違うのだからそのような態度にもでるだろう。

体が小さいものが大きいものに立ち向かうのは、力勝負ではなかなかきつい。

けれど彼女は負ける気は毛頭なかった。力勝負をするつもりも全

くない。

気持ちが悪いとしか形容できない男の笑みと、少女のうずくまる姿。

彼女の導火線はとんでもなく短かったため、あっという間に焼き切れた。それこそ、その先についている爆弾の爆発音まで聞こえてきそうなほど。

「目に物見ろ」と伯爵令嬢ならぬ言葉を発したと思えば、その冷笑を顔に張り付けたまま、地面を蹴った。

滑走する彼女はあっという間に蹲るその少女の横を駆け抜けた。

少女は顔をぶたれたせいか、ルデイの姿を追おうとしてか顔を上げたものの、右眼があまり開いていなかった。ルデイは更に加速する。

男はそのルデイの素速さに一瞬目を見開いたものの、腰に下げた剣を抜いた。

厚手で大ぶりのそれが、路地裏に若干射しこむ光を反射して不気味に光った。少女が短く悲鳴を上げた。逃げて、とも聞こえた気がする。

「どこに逃げる必要が？」

ルデイはその笑みを深め、男をその視線で射抜く。彼女のその笑みに、男の顔が一瞬引き攣った。

先程までの余裕は、その一瞬でルデイに吸い取られてしまったかのような。

男が剣を左に薙ぐ。狭い路地裏だ、左右に逃げ場はない。

しかしそれは相手の行動もかなり制限されるといってもある。

ルデイは落ち着いてその切っ先を左手で握った短剣で受け止めると、その薙ぐ動きに合わせるように移動しながらそのまま男に突っ込んでいく。

男は予想外の動きに驚き、ルデイを叩き切るうとでもいうのか、一層力を込める。

剣の中ほどまで来たところで、折れることはないだろうと思いいながらも、体を抜くその瞬間に短剣を力任せに引っ張った。

相手の体勢を崩させ、そこを一気に突くつもりだったが、ばきんと小気味のいい音がして、なんと相手の剣が真つ二つに折れた。

「は」と相手からなんとも言えない言葉ともつかない単語が漏れる。折れた剣先が石畳にあたり、からん、となんとも軽々しい音が響く。

一瞬あつけにとられたのは相手もルデイも同じだったが、彼女は直ぐに正気に戻り、そのまま予定通り素早く男の手首を切りつけた。鋭利な短剣が切り裂いた傷口から、勢いよく血飛沫があがる。

その利き手を男は慌てて押さえると、二三歩よろよろと後退した。その顔は真つ青で、唇がぶるぶると震えている。押さえる場所からの止めどない血に恐れ慄いているようであった。

その姿はなんとも情けなく、ルデイはふん、と鼻を鳴らした。

「さっさと行きなさい。さもなければ次はその首を狙う」

男はずるずると下がると、先を無くした剣をそのままに、口の中  
でなにやらぶつぶつと悪態をつくと駆け出して行った。

大柄な男が小柄な男装女から逃げ出す様は、これが初めてではな  
いから恥じることはないぞ、と外れまくった考えを巡らせ、ルディ  
は大きく頷いた。

とりあえず血が男の後に後に続いているから、これが自衛団に見  
つかつたら大分面倒だ。この場にいるのはまずい。  
それにしても。

「・・・随分ちんけな剣を使っていたのか」

相手の落した剣の柄を持ち、目の前に掲げる。

いくら相手がドルトナンド家の短剣であろうと、あそこまで奇麗  
に折れるとは。いつそ清々しいわ。

ルディはぼい、と柄を投げだすと、少女に歩み寄った。

少女はびくり、と体を揺らしたが、もう疲労困憊らしく、こちら  
を見上げる頭が右に左にと揺れる。

そつとその頭を撫でると、至極優しい声でルディは少女に話しか  
けた。

「疲れたでしょう。少し休むといいよ」

その言葉が切っ掛けとなつてか、少女の体はぐらりと傾き、その体をルディは抱きとめる。膝の裏に手を回し抱き上げると、その見た目十二、三に合わないほど軽かった。

一応自分も女性なので少女一人運ぶのも苦勞するかと思つたが、それほど苦勞もなく目的の場所に着くことができた。

木製の扉を押すと、少し錆びついているのかやや響きの悪い鈴の音が響いた。その音に誘われて奥からひよっこりと顔を出した女性は、不思議そうに首をかしげた。

「邪魔します」

「ルディじゃない。ってどうしたのその子」

奥から、つけたエプロンで手を拭きながら出てくる彼女のくびれた腰の上には、二つの球がでんと居座つており、毎度ルディは自分がないものの為かそれを見つめてしまい、何やら気まずくなつて視線を逸らした。

ちらりと視線を店に向ければ、喫茶店のくせに客が全くいない。

それもそのはずで、この店は夜専門だ。そんな夜専門の女性とは、以前自分が客に言い寄られていた彼女を助けたことから関係を築いている。

大らかな雰囲気でありながらもとんでもなく度胸が据わっている彼女は、情報通でもあり、その情報と度胸で客を切り抜けてきたものの、その時は状況が悪かった。だから自分が相手をのしただが、その後彼女が裏から手を回してその客を潰してしまった。

その時は本当に自分が必要ではなかったと思っただ程だ。同じ女として恐ろしい。

それからというものを店を開けている時間以外は、こうして自分と時間を潰すこともしてくれる。

情報通の彼女には自分が既に伯爵家の娘だとばれている。こうして通うのも、だからかもしれない。

彼女に断ってから、店の長椅子の上に少女を横たえる。

「でえ？」

説明しろと暗に訴える店の主、美女ファルナールの視線に、ルデイは肩を竦めた。

「よくわかんない」

「はあ？と言わんばかりに盛大に顔を顰めたファルナールにルディは口を窄めて見せた。」

「説明受ける前に倒れた」

「なんでそんな面倒くさい子を連れてきたんだ、という顔だ。」

「どうやら彼女の情報にはない人間らしい。」

「彼女とそれとない会話を交わしていると、目の前の体からうめき声が聞こえた。」

「ついで小刻みに震えた瞳からゆっくりと琥珀色の瞳が現れる。」

「虚ろな目で天井を見つめていたので、どうしようかとファルナールに視線をやると、彼女はくい、と顔を動かす。話しかける、ということがあるか。」

「大丈夫？」

「その声を聞いてか、少女の首がゆっくりと動く。」

「ややあって、ルディの顔を見つめる目が大きく開いていく。」

「あつ、あのっ！...！」



ああああ、と頭を再び抱え、悶絶しだす少女に他の二人は啞然。  
一頻り唸った後で、再びルディを見た彼女の瞳には徐々に輝きが  
戻っていく。そして再び手をがっしりと、今度は両手で握られて、  
ルディは思わず体を引いた。

「ああああの！！騎士様ですか！！」

「い、いや」

ルディの応答にまたもや肩を落とす少女だったが、復活するのは  
またもや早かった。

「いや、でもでもでも！ぼんやりとしか覚えていませんが！！かな  
りお強いようにお見受けしました！！！！」

少女の並々ならぬ目の煌めきにルディは、眼を瞬かせる。

「無礼を承知でお願い申し上げます!!どうか闘技場で優勝してくださいませ!」

・・・訳のわからないことになってきたぞ。

混乱するルディを余所に少女のテンションはマックスだ。そこへ流石というべきか、ファルナールが待ったをかけた。

「待ちな。まずあなたは誰なんだい?あたしは知らなくても結構だけど、この子はあんたを助けたんだ。名ぐらい名乗ってまずは礼をするのが普通じゃないのかい」

がっしりと少女の頭を掴み、眼を合わせた彼女からは逆らい難いオーラが溢れ出ていた。言葉使いが姐さんになっているからか。なんとなく心の中で拍手をおくってしまった。そう、心の中で。

少女はカチン、と固まったが、直ぐに長椅子からすっくと立ち上がった。

「申し遅れました。わたくし、テルミア・ハッケンベルドと申します」

短いワンピースの端を持ち、彼女は綺麗に礼をしてみせた。ハッケンベルド、その名はルディでも聞いたことがあった。

「元お貴族様というわけね」

ファルナールがすっぱりというと、テルミアは苦笑して見せた。

「ええ、今は没落貴族です。平民となりましたが、それを苦には思っておりませんので、どうぞお気遣いなさらず」

ルディの様子を見て、言葉を付け足してくれたようだ。ルディは没落貴族の名をしっていても会ったのは初めてだった。

だからこその一瞬の困惑だったが、なかなかこの少女は洞察力があるようだ。・・・冷静であればの話だが。

「ええと・・・で、そんな君がなぜあんなところに？」  
ルディの言葉にしょんぼりとしたテルミアは、長椅子にすくと  
腰を下ろすと再び話し出した。

令嬢、少女を助ける(後書き)

ありがとうございました！

令嬢、美女に会う(前書き)

第三話です。ルデイの家は最強家族。なかなか王様が出てきません。

## 令嬢、美女に会う

彼女の話をかき摘むところである。

ハツケンベルド家は困窮していた。それこそ自分たちの生活もぎりぎりだった。それなのに領主を続けることは、実質不可能だった。彼らの知らぬ間にハツケンベルド家の領地はゆっくりと荒らされ、とてもではないが彼らの力だけでは打開できない状況になっていた。そこで王から、領地内の膿を出すために爵位を返上し、新たな領主を据えることが提案された。つまり、ハツケンベルド家に没落貴族になれという。それは実質仕方がないことであつた。

ここ数年領民を守れぬお飾りの領主であつたハツケンベルド家が領主を続けられていたこと自体が、奇跡に近かつたのだ。

テルミアの父親はそれを飲んだ。

片田舎領主であろうと、没落貴族になることは不名誉。

しかし、彼女たちの家は、十分に領民との関わりがあつた。領民を助けるために、その提案を飲むことは仕方がないことだ。

例えば彼らが領主でなくなるとしても、領民が彼らの敵になるわけではない。

領主が領民にしてやれる最後のことでであるとテルミアの父は言つたらしい。

そうして彼らは没落貴族、ただの平民となった。

それまでと変わったのは、使用人のいない大きすぎる家から、村から少し離れた小さな家へと移ったことくらいであった。

元の屋敷は新たな領主に明け渡され、今や元の荒廃ぶりは思い出せないほど改善された立派な屋敷と化したらしい。

ここまでくると、屋敷にすら申し訳ない気持ちになる。

・・・貧乏でごめんさい。

家族揃って、家に頭を下げた没落貴族というのも、ハッケンベルド家だけではなからうか・・・。

それから畑を耕し、村人たちと日々他愛もない話をして、それなりに落ち着いた生活を送っていた。

屋敷の管理をしなくなった分若干家計に余裕もでき、昔より幸せだと思えると没落貴族という名称すらテルミアは殆ど気にはしなかった。

しかしそれで終わりではなかった。新領主が手腕を振るい、徐々に領地の治安が戻ってきたころ。

彼女の家は、屋荒らしにあった。

領地の膿の最後の足掻きとでも言うのか、小さくなったハツケンベルドの家から、金目のものを根こそぎ持っていかれた。

元々金品など微々たるものであったが、盗まれたものの中に、母の形見のブローチがあつたのだ。母は、テルミアを生んで、数年後、まだテルミアが幼いときに持病でなくなってしまった。

彼女の形見の大きな翡翠のブローチは、どんなに困窮しようと父が手放さなかつたものだ。

盗まれたと知つたその時の、父の顔は忘れられない。

真つ青になつて、必死に荒らされた家の中を探す姿は、テルミアの心を締め付けた。

賊がその後王都付近で見つかったとき、既にブローチは賊から別の方へと移っていた。

居てもたつてもいられず長旅に長旅を重ね、最も商業が賑わう王都に来たテルミアの目に飛び込んできたのは、闘技場のチラシの景品欄に張られた母のブローチの絵だった。

ただ売られたならば、頭を下げたつて、何をしたつて、取り戻そうと思つていた。

勿論ここに来るまでにお金は使い切つてしまつていたから、何をしても必要な代金を稼ぐ覚悟もしていた。

しかし、大会の景品とされていてはどうしようもない。

景品としてのものを買い取ることもできない。まして盗むこともできない。

母のものだと示そうにも、どうしようもない。彼女には取り戻す方法がなかつた。それでもと、大会の関係者だという男に会い、な

んとか頼みこもつとして、こっぴどくやられたところにルディが来たというわけだ。

「勝手だということは重々承知でございます。なんでも致します。だから、どうか、母のブローチを取り戻していただけませんか」

目を潤ませ必死に頭を下げるテルミアに、ルディは肩を竦めた。

「なんでもする、なんて女の子が簡単に口にしたらだめだよ」

はっとしたようにテルミアが顔をあげた。その瞳には、断られるのではないか、という不安を通りこした恐怖が見えている。しかし、

ちゃんと反省の色も見えた。

なんでもする、といった女の行く末を知らないわけではないらしい。そこまで覚悟して、その言葉を口にしたのか、とルディは少女に対する見方を改めた。

ならば、自分ができることをしてあげようではないか。

「・・・大丈夫。私が、なんとかする」

保障はできないけどね、と笑うルディにテルミアは目を見開き―大粒の涙を零した。

ぼんぼん、と慰めるように背中を叩くルディにすがるようにテルミアは泣いた。最初は小さかった嗚咽も、段々と大きくなっていく。たった一人で、王都まで来て、知りもしない街で、必死に形見を探して、自分なんて絶対に太刀打ちできないだろう大男に頭を下げて、どんなに恐ろしかったろう。

彼女を支えていたのは母と、父への思いだけだったろうに。

ルディはテルミアの気が済むまで泣かせてやった。泣ける時には泣いておけばいいと思った。彼女の年齢より小さな背中が、丸くなくなったことでさらに小さく見える。

その姿は、まるで幼少時の自分だった。

その時、こつやって背中を撫でてくれたのは、はて、誰だったか。まるで夜の空に溶け込んでしまいそうな髪の色の一

いきなり腕の中に、ずしり、とした重みを感じ、彼女は腕の中の存在を見た。

それまでの疲れからか、一頻りなくとテルミアは寝入ってしまったようである。

毛布をテルミアにかけて立ち上がったルディと、ファルナールの視線が絡んだ。

しばらくお互いが無言だった。

先に口を開いたのはファルナール。

「・・・あなた、女なのよ」

「闘技場で女が闘ってはいけない、っていうルールはない筈でしょっ」

ゆっくりと笑むルディを、睨みつけるファルナール。

「だから、お願い、ファナ。私に闘技場の情報を売って。私を出場させて」

彼女の力を借りなければ、さすがのルデイでもキツイ戦いとなるだろう。伯爵令嬢である以上無傷で優勝しなくてはならない。傷一つでもあれば後々家でその理由を言及されることは見えている。

実際のところ、ルデイが思っている以上に彼女に対して家族は過保護がすぎるほどであり、もし彼女が傷つけられたと知ったならば家全体が立ち上がって報復に向かうだろう。

・・・会場外で血みどろの戦い。しかも血みどろになるのは相手だけ。

笑顔で相手を根絶やしにするだろう、彼女の家族は。

しかし今大会には將軍クラスの有力候補も出ると聞いた。条件は厳しい。

更に言うなら、その賞品が本当にテルミアの母のものかも確かめる必要がある。

彼女の紅い瞳がルデイの碧の瞳を射抜く。ルデイはただ穏やかな顔でそれを見返した。

沈黙だった。

テルミアの微かな呼吸音だけが聞こえる。

ただ燃えるような瞳が、ルデイの本心を暴かんが如く見つめてく

る。それを、恐ろしいとも避けようとも思わず、ただルディは受け止め続けた。

どれくらいそうしていたのか。

やがて、紅の瞳が揺れ、

「・・・わかった」

深くため息をついて、ファルナールは肯定の意を表した。

「ファナ」

「だけど、忘れないで」

安堵の表情を浮かべたルディに、ファルナールはそれでも鋭い眼を向けた。

「確かに貴女は強い。けれど、貴女は女なの。自分を大切にすることを忘れないで」

真摯に自分を案じてくれる美女に、ルディは笑みを返した。

令嬢、美女に会う（後書き）

ありがとうございました！  
誤字をなおしました。

陛下、闘技場へ行く(前書き)

やっとここに陛下登場。しかし絡みはまだなし！(苦笑)

## 陛下、闘技場へ行く

重苦しい正装にももう慣れた。

肩にずっしりとくるこの衣服は、10キロを優に超えているだろう。

執務で凝り固まった肩をこきり、と鳴らしながら、レーナルト・シユナンベルムは再び闘技場を見下ろす。

太陽を遮るように影とされた場所、そのやけに凝った椅子に自分は座っている。

空は快晴、からつとした空気は運動にはもってこい。

まあ、これから行われるのは運動なんて生易しいものではないが。

広い闘技場には轟めく国民。誰もが客席下の門から出てくるであろう挑戦者たちを今か今かと待ち構えている。

今大会は、王家の将軍、宰相の息子やらも出るらしく、観戦を是非に、と言われ出席しているのだが。

「なあ・・・僕も出てはダメか」

「だめです」

近衛騎士であるルイザスは背もたれに体重を預け、心底つまらなさそうにしている王に、鋭い眼を向けた。

彼の銀髪が、さらりと動いた。男の髪にしておくのは勿体ない質である。たまに侍女たちが彼の髪を羨ましそうに見ているのだが、彼はそれには気づいていないようであった。

ルイザスもまた黒で固められた王直属の近衛兵の服をきつちりと着ている。銀の髪と相まってパツと見近衛兵には見えない。

本来、彼もそこまできつちりしたものは好まないからか、いつもよりも機嫌が悪い気もする。

「ここは公の場ですので、呼称を変えてください」

「私も出ては「だめでございます」

はあーっと溜息を洩らす王に、ルイザスはこほん、と咳払いをする。

「今回は將軍であるバーデルード様、宰相の御子息であるハバーニール様など、有力株が出揃っています」

だからきつと面白いです、とルイザスは感情を込めずに言う。ルイザスとて私が言いたいことなど分かっている癖に。

「・・・自分が戦わぬ試合など」

「陛下が出られては困ります。貴方は王です。それに誰が相手をするのですか」

「ルイザス」

「嫌です」

お互いの口調がだんだんと棘のあるものへとなっていく。大分険悪な雰囲気の流れ出し、その場にいる他の近衛も身を置く場所がない、というように居心地悪そうだ。しかし、それに彼らは気付かない。

「大体、なぜ私が出られないのだ」

「貴方様が王であるからです」

「一年前は出たではないか」

「貴方様が強すぎて、景品を根こそぎもっていかれたからでは」

闘技場側も困っていただろうし、王としてもっと腰を落ちつけろ、と周りの低能たちが五月蠅かったからもある、とルイザスは心の中でつけたした。

王の実力は折り紙つき。正直近衛が必要なのかも不思議なレベルだ。いや、それは外聞もあるので勿論つけるが。

戦争ばかりの自身の曾祖父の時代ならば、その実力をいかになく発揮し、その黒髪から黒獅子などという異名をつけられていたかも知れない。

だが残念ながら彼は戦闘狂とはほど遠く、その少し垂れ下った眼尻から醸し出す雰囲気からわかるように、血生臭い戦を嫌う。

ここまで強くてなぜそんなフェロモン全開の顔なのか甚だ疑問である。

ただ本人が剣が好きなのは事実で、憂さ晴らしにと時にはルイザスが相手をするときもある。

・・・王に模造剣といえど剣を向けている自分も中々だとは思う。

しかし今更、この王との間はそんな堅苦しい関係ではない。時にふざけている彼を嗜めるのは自身の役目。

ならば剣の稽古と称してこちらも王相手にストレス発散させて貰ってもいいではないか、と思う。

勿論口が裂けても言えないが。

とりあえず、そんなにも彼が強いために去年までは許可されていた闘技場での大会の王の参加は、今回は見送りとなった。

理由は先の通りであるものの、その分溜まった王の鬱憤は誰が晴らすのか。

その鬱憤の八割方が、剣での打ち合い以外の、執務での方向でも自分に向かってしていると分かっているルイザスとしては、どつしりと重すぎる腰を据えた重鎮どもにお前が晴らせ！と叫びたいところだ。

ああ、眼に浮かぶ。椅子に座って判を押すことしか知らない奴らの、使いもしない腰にほおら俺の剣が・・・

そのかなり危険なルイザスの意識を中断させるように大会の開始を知らせるファンファーレが鳴り響く。

わざとらしく白い鳩が何十羽と解放され、空へと飛び立っていく。随分趣向のこつたことだ。

大仰な身振り手振りで解説者と司会者が開始を告げると、客席が沸き立った。試合場の両側の扉が重苦しい音を立てて開いていく。

さつそくハバーニールとやらの出番のようだ。不正がないよう闘技場からの貸し出しとなつてゐる剣を握る様は中々ではある。彼の鮮やかな紅の髪が風になでられていく中で、彼は背筋を伸ばし、その顔に笑みを浮かべながら入場してくる。

一斉に上がる女性からの奇声にも近い声に、レーナルトは顔を顰めた。王子時代に自分の黒髪と紫の瞳の容姿であげられ続けた奇声は、彼に若干のトラウマを残していた。

それをなんとか振り払い、噂の宰相の息子に目をやる。

ハバーニールとやらは少し長めの長剣を、自分より頭一つ大きい男に向けた。相手の男の武器は斧。剣と斧ならば、リーチで少しは有利になるかもしれない。

闘技場の勝敗は、相手が降参の意を示させるか、戦闘不能にさせること。

「……まあ多少の腕はあるようです。勝ち上がるでしょう」

「そつだな。」

大して面白くない。心底そう思った。自分への売り込みや、ハバーニール自身に箔をつけるための試合だろう。

予想通りハバーニールは勝ち上がった。次いで予想通りとも言えるが、バーデールドも余裕の勝ち上がりだ。どちらも実力がないわけではないから、そこそこ面白い試合なのであるが、やはりレー

ナルトには面白いとは感じられなかった。

彼らのつまらなそうな顔が変わったのは、第一回戦の30試合目だった。

陛下、観戦する（前書き）

令嬢、戦います。陛下見てるだけ！！

## 陛下、観戦する

「第一回戦は最後か」

一回につき数分で終わる戦いとしても、やはり自分が出ていない上、正直目を見張る剣技ばかりが飛び交う訳ではない。

いくら選抜メンバーだとしても、あくまでも相手を打ち取るための戦いである故に、美しさなど必要ないのだ。

泥臭い試合や、へたくそな剣技ともいえない応酬もあって当たり前。そこは目をつぶらねばならない。

最後ということとは、大したことがないのだろう。最初の方に盛り上げ役を持ってきて、中盤でも同じ手を使い、観客を盛り上げるのがこの闘技場の手だ。

一番最後は、第二回戦に向け観客もいそいそと準備をし出すところだから、直ぐに終わる試合を持ってきているのだろう。

試合後、すぐに片づけられるように、闘技場の使い走りが場外にかまえているのがちらほら見える。

「確かに、これはすぐ決まりそうですね」

ぼそり、と近くにいた近衛が呟く。確かに、レーナルトから見ても、勝敗は明らかだった。

片方は男にしては背は低く、細すぎる。まるで栄養が足りていないようだ。

彼のどこにでもあるような栗色の髪は、肩を過ぎるところまであり、なんだか重そうだった。目深にバンダナをした姿は、子供にしか見えない。

少し細身の剣を二振り握っている。二刀流の剣士なのだろう。その立ち姿は自然体であった。

方や相手はかなり大きかった。筋骨隆々としかいいようがない、立派な体つきだ。

まるで剣の重さを確かめるように、剣身だけでも少年の身長を超える長さの剣を二三回振り回している。

開始を告げられた後の少年を思って、レーナルトは眉を顰めた。

間違いなく、直ぐに決まる。この第一回戦の闘技場は逃げ場がない。少年が身を隠し、応戦できる地形ではない。力で押されて負け、地に這いつくばる少年の姿が思われた。

『はじめ！』

少年は二本の剣を構えるでもなく、防ぐために交差させるでもなく、ただ、走った。

広い闘技場―そこそこの距離があるそれを一気に詰めていく。

早い！

レーナルトは目を見開いた。

男が少年の行動を無謀な特攻とみてか、嫌な笑いを浮かべたのがここからでも見えた。男も剣を構え、少年に向かって走り出す。

あと5メートル。

男が全身の力を籠めて剣を振りかぶった。バンドナの少年を屈服させる様ももう見えているようだ。しかしそこで少年は行き成り踏ん張って止まり、そのまま後ろにジャンプで後退した。

あつという間の事で、男の少年を捕らえる筈の剣は空をかく。

どこを捕らえることもできなかった剣に巨体が引きずられ、男は一瞬態勢を崩したが、直ぐに左足を踏み込み、今度は逆からもう一度剣を振るった。

そこでまたしても信じられないことが起こった。少年の二振りの剣が交差され、男の大ぶりの剣を受け止めた。一ように見えた。

しかしそこで少年はぐるりと体ごと剣を回す。重なり合った剣はそのままに、男は自分自身の力に引きずられ、無様に左肩を地面に打ち付け、思わず苦悶の声を漏らした。

少年の口がにこり、と笑った。

投了、しなよ。

確かに、そう動いた。二廻りどころか、三廻り以上も小柄な少年に大の男がいいようにされている。しん、と闘技場が静まった。

男が一瞬訳が分らない、といった顔をしていたが、少年の言葉に顔を真っ赤にして、言葉にもなっていない雄叫びを上げながら、少年の剣から無理やり自分の剣を引き抜き、再び振りかぶった。

少年は溜息でもついたのでだろうか。肩が少し上下に動いた。少年は、ぎりぎりまで動かなかった。どこからか少年が叩き切られる、と予想した夫人の悲鳴があがる。しかし、レーナルトは思った。

ー正しい。

剣筋をぎりぎりまで見極め、少年はほんの少し横へとずれ剣を避けると、また突進した。男の剣は全く意味をなさず地面にその切っ先を埋め、男の再びの抵抗手段を奪う。

男の懐、体の真下に潜りこんだ少年はそこから更に神業のような技を見せつける。

地面に躊躇なく片方の剣を突き刺すと、それを軸に男の顎を下からけり上げる。

それは確実に当たり、がちんと上顎と下顎がぶつかる音がした。舌を噛んでいないのが奇跡だ、とレーナルトは冷静に思った。

顎が揺れば、脳が揺れる。

男は脳震盪を起こし、目をひんむくとぐらりと傾いた。着地した少年は、再び今度は男の腹を蹴り飛ばし、思わず膝をついた男の米神に容赦なく横蹴りをくらわせた。

ごっつん、と骨と何か固いものがぶつかりあう音。

どうやら少年は、何も身につけていないように見えて、しっかりとその黒衣の下に防具を着込んでいるようだ。

その連続した攻撃に、男は成すすべもなく再び地面へとその身を

倒す。

少年は残った片方の剣を男の首筋につきつけ、勝利の笑みを零す。

「私の勝ちですね。・・・て、あれ、意識ありませんね」

「どうしよう、と言わんばかりにきよろきよろと辺りを見回すのは、小動物さながらである。しん、と静まった会場にも不安を覚えたのか、司会者に目を合わせると、不安そうに。」

「勝ち、ですよね？」

司会者もはつとしたように少年と男性を見比べると、ぱり、と頭をかいた。

「え、ああ、はい・・・」

「良かった！」

極上の笑みだった。ほっとしたようなその顔に、一体闘技場の何人がノックアウトされたのだろう。

その少年の持つ独特の雰囲気はいうまでもなく、しっかりと司会者を見上げたが故に、ほとんどの者が見ることがただろう。その美しい、というべき顔立ちを。

退場のために振り返った少年の瞳は、碧色だった。まるで隣にいる、ルイザスのような。

それにあの剣捌き。只者ではない。まるで、ドルトナンド一族のような、強さ。

今のドルトナンド伯爵家には銀髪ばかりだとときく。  
とすると栗色の髪である彼は、緑者だろうか。

「ルイザス、あの者は」

ルイザスに親戚かなにかか、と尋ねようとしたレーナルトはぴたりとその動きを止めた。

隣にいる近衛筆頭は、どうやらレーナルトに声をかけられたことすら気づいていないようで、口を半開きにした真っ青な顔のまま、直立している。

彼の戦慄く唇などそうそう見れるものではないと、これ幸いと言わんばかりにレーナルトはしげしげとその横顔を眺めた。

そのままその口に何か突っ込めそうである。いつそ本当に何か突っ込んでしまおうか、とレーナルトが視線を巡らしたところで、ルイザスの口が動いた。

「な、なぜ・・・」

彼の視線はただ一点。その少年に注がれている。少年が退場していく様をガン見していたが、その姿が消え、重々しい音とともに扉が閉められた所で、はっとレーナルトの視線に気づくと、姿勢を正した。

しかしルイザスとて人間、その一瞬でどこまで持ち直せたものかと見ていたが、彼はそこらへんの人間には、先程までの尋常でない様子など気付かせないレベルまで一瞬で持ち直して見せた。未恐ろしいやつである。

しかし後の祭り。

先ほどから観察していたため、彼が何に驚いていたかなど考えるまでもない。

レーナルトは興味深そうにルイザスと少年が消えた扉とを見やり、口角をあげた。

「知り合いか」

「いえ、知り合いに似ていたので驚いただけでございます」

即答したルイザスを、レーナルトが面白そうに見てくる。

半分、嘘。 半分、本当。

ルイザスは心の中で付け足した。レーナルトには長い付き合いながらもあり、きつとただ事ではないと気付かれているだろう。

けれど隠さねばならない。

なぜなら、彼、いや彼女は、おそらく自身の妹なのだから。



## 陛下、観戦する（後書き）

ありがとうございます！いつになったら陛下と令嬢はからむのでしょうか・・・

少し紹介文を変更しました。

令嬢、将軍に会う(前書き)

令嬢がんばっております。まだ全然恋愛要素がなry

## 令嬢、將軍に会う

鬘が重い。頭の中が蒸されているようだ。額から流れ出た汗がバ  
ンダナに吸い取られていく。

王が来るといふ情報をファルナールから買い取り、王が来るとい  
うことは近衛筆頭の長男ルイザスも来るであろうと予想することは  
た易かった。

彼と同じ銀髪を隠すために、今はこの国でも大して目立たない栗  
色の鬘を被っている。しかし。

「……絶対ばれてる!!」

自分で言うのもなんだが、兄は過保護だ。世にそれをシスコン、  
などと呼ぶのだが、そこまでは彼女の知識にはない。

ただ、退場時にまるで体を突き刺さんばかりに注がれた視線は、  
恐らく兄のものだったと思う。会場全体から注がれた好奇の視線の  
中でも、あれだけは間違えようもない。

「ああ……どうしようかな……」

くしゃり、と鬘の髪を握りつぶし、ルディは呟いた。バレている以上、もう自身に逃げ場はないのだ。後々家に帰って説教だろう。公には病弱引き籠りを演じているといえど、どこまでいっても彼女は伯爵令嬢。さすがに闘技場出場まではドルトナンド家でも認めはくれない。

煉瓦づくりの道を進みながら、溜息を吐く。途端、埃っぽい空気を吸い込んだことに顔を顰めた。けほ、と思わず咳をする。

国内の闘技場としてはここは最大規模だが、流石に猛者ばかりが出るのと、丁度試合の真っ最中ということで、入口付近のここらは砂と埃にまみれている。もう少し掃除をしてほしいところだ。

待合室に行けばまだ綺麗だからと、気まぎれに手袋で覆われた手を口元にやった。これでどう変わるわけでもないが。そしてぼそりと呟く。

「とりあえず、優勝しなくちゃな」

「おお、随分な自信ですな」

独り言のつもりで言った言葉に返事があって、ルデイは驚いて顔をあげた。

目の前に立つは、明らかに格が違う騎士。胸には国の象徴である鷲が描かれている。

どうみても、將軍バーデルド・カルカンド。どうして気付かなかったのか、こんな存在感のある人を。思わず苦虫を潰したような顔になるが、彼はそんなことを気にしたようもなく、その顔に笑みさえたたえている。

少し濃いめの髭の下に隠れている顔は、一言で言うならダンデイ。貫禄を伴った余裕ある雰囲気とともに、どこか厳格な父、という印象も与えてくる。

將軍の話は兄から多少だが聞いたことがある。兄自身も手合わせをしたことがあると。

その鍛えられた体に見合ったパワーと、それでいて柔軟な動きを兼ね備えており、それなりに手応えがあったと兄は言っていた。

どうも兄からの話は上から目線ではあったが、的を射た意見であるとは思う。

兄は自分より強い。それこそ暗殺系の技でも使わなければ勝つことなど絶対に不可能だ。・・・使ったとしても五分。

その兄が認めた男。このままいけば間違いないぶつかるだろう。

「先程試合を観させて頂きました。名の立つ方とお見受けするが？」

「いえ・・・立つ名など持ってはおりません」

低く！低く！最大限声を低く！

冷汗ものでルディは言葉を発した。

「大会登録名はテルミオ、でございましたな」

そうだ。自分の愛称も本名も使うわけにはいかないの、自分の目的、すなわち彼女のブローチを取り戻すことを示す為に、テルミアの男性名、テルミオとした。

「偽名でありましたが、それこそ関係はない。是非手合わせ願いたいものです」

よし！よし！終わった！これで終わったわ！

バーデルドの微笑を受け、これで会話が終わると胸を撫でおろ

した。  
ナイス自分、一文しか喋らなかった！  
しかし。

「ああ、噂のお方と話しておいでなのですね」

ああ！またしても面倒なのが！  
なんだっけ？ハーバードとかなんとかいった名前だったと思うが、  
どうも名前が出てこない。つり上がった目に短めの赤髪は確かに美  
形の部類だ。

ただ、なんとなくルディはこの方は苦手、と判断した。この自分  
の容姿にも実力にも自信満々、といった男は苦手だ。

「ハバーニールと申します。テルミオ殿」

そうそう！ハバーニールだよハバーニール！

「先程の剣捌き、どちらで会得なさいましたので？」

探るような視線を向けられた。居心地の悪さに思わず身じろぎする。

・・・やれやれ。大分率直に聞いてくるものだ。そんなに人様の事情が知りたいか。何様だ。闘技場なんてところにいる時点で何かを察しろ。

バーデールドも率直過ぎるハバーニールの言葉に苦笑を洩らしながら、ルデイの言葉を待っている。

どうしたものか。

一瞬思案してから、彼女は口を開く。うつすらとその顔に笑みを刻んで。

「そこは・・・秘密といたしましょう」

あえて引っかけ回すのも面白い。思いがけなかった返答にか、頬を引きつらせたハバーニールと、ほお、と感心するように呟いたバーデールド。

馬鹿正直に話すなんてもつてのほか。こちとら愛憎渦巻く社交界で生きていくために、姉さまからさんざん口上は叩き込まれた身。

その程度の言葉など受け流して、そのまま送り返してくれるわ！と訳の分らないことを考えながらルデイは笑んだ。

ただし実際のところ、自分自身がその社交界から逃げ回っている

ので、使う道などほぼないのだが。

「私も事情があつてこの場にいるのです。剣での期待になら応えましよう。ですが、私の事情についての期待にはお話しするほどのことでもなく、お二人のお耳汚しになることかと。どうぞ捨て置きを」

要は、試合の場での喧嘩なら受けて立つてやる、けどそれ以上人の事情に首を突っ込むな、という意味だ。

それを正確に受け取ったバーデールドは大笑い。  
にっこりと笑ったルデイに一気に顔を赤く染めたハバーニールがどこまで理解してくれたやら。ていうか怒り？怒りで赤くなってるのかしら？なんでバーデールド殿はハバーニール殿を見てにやにや？  
内心首をひねりながら、ルデイは別れの口上を口にする。

「それではこれにて」

「ああ、君との試合を楽しみにしているぞ！テルミオ」

できるなら楽しみにしないでください！

そう心の中で呟きながらルディは二人を避けてそのまま待合室へと向かったのだった。

令嬢、青年と戦う(?) (前書き)

なかなか進まない・・・笑

## 令嬢、青年と戦う(?)

最初六十人だった試合も、第一試合後には半分の三十以下。

ぴったり三十とならないのは、戦闘不能になったのは敗者だけではないからだ。勝者にもダメージはある。それゆえ、途中辞退ということもあり得るのだ。

第二試合は正直第一試合よりもしよぼかった。

勿論自分よりも背の高い男性は、どうみても経験者とは言い難かった。・・・賄賂であがってきたか。

そののなぜか殺意の湧くだらけきつた顔を、鞘のついたままの剣で吹っ飛ばす。

ああ、痣くらいはできたかな？ごめんね、でも少しはまともな骨格になったかも知れないわよ！整形代はいらないわ！

心の中では伯爵令嬢とは思えないセリフを吐きながらも、ルディは優雅にその場を後にした。

模造剣でなければ腕の一本でも貰っておけばよかったかしら。

今更だが、闘技場の剣は模造剣にも近い剣だ。参加者の腕や足やあげく頭が吹っ飛ぶ試合など、見るに堪えないからだ。

勿論皮膚の一枚二枚は持っていける剣だが、さすがに腕を吹っ飛

ばすのは無理だ。

勿論一発当たると痛いじゃすまないから、当たるのは本当にごめんだ。

ルディはこうして第三試合へと臨むことになった。

第三試合最後では、ハバーニールとバーデルードが対戦するようだ。観客としては、ここでもう決勝戦が行われてしまうようなものだろう。

それはさておき、第三試合で彼女が当たったのは、騎士然としたどこか柔らかな相貌を持つ青年だった。

鬘の彼女とは違う真正正銘の栗毛。

立つ姿は今までの相手とは違って隙がない。

第一試合の相手は、余裕の見せすぎでまるでどこからかここに風穴があいているようだった。

第二試合の相手は、緊張のしすぎ。がちがち。どこから突いても気持ちがいいくら決まっただろう。いや、実際気持ち悪いくらい綺麗に決まったのだが。

人間上手くいきすぎると実際不安になるものである。

・・・不安になる要素などないとわかってはいたけれどね。

それに比べて今迎え撃とうとしているのは、力が入りすぎてもない。かといって全く緊張していないわけではない。

場慣れしているような雰囲気。

「あ、面倒・・・」

「面倒とは失礼だね」

あらま、聞こえてたみたい。

自分の独り言、最近独り言じゃなくなってきたみたいだなあ、とどこか遠い眼をしてみる。あ、空が青い。あそこにとまってるのはさつき放してた鳩？逃げればいいのに。

あ、逃げた。飼われてた鳥って自然に放しても生きていけるのかなあ、動物は強いからいけちゃうのかな？

かなりの現実逃避である。

・・・勿論、まだ試合が始まっていないからできる芸当だ。

『はじめっ！』

会場に響き渡る音量で開始のアナウンスが放送される。

ルディは防御の構えをとる。

しかし一向に相手が動く気配はない。にこにこ笑いながら突っ立っている。

・・・びっしょり。

ルディは今まで、まるで突っ込んでいったように思われるかもしれないが、実際は違う。相手の攻撃を誘い、初撃は受ける。というか受け流す。

基本的にルディの戦い方は相手の力を利用し、そこに自分の力を上乗せし、助長させることにある。だからこそ、初撃がこちらからというのは致したくない。第二試合は例外だ、うん。

しーん、と静まった試合会場に、ざわざわと観客の動揺が広がっていく。

いやいや私もびっくりです。てか多分私がびっくりです。なんですか、この人。

「  
・・・  
」

どうしよう。相手は一切動かない。

これは相手の作戦？切りかかっていったら逆にやられてしまうのでは、と余計ルディは身構えた。

まるで睨めっこのように見つめあう二人。ごくり、と思わず唾を飲み込んだ時だった。

男は微笑をたたえたまま、剣も抜かずにしたすと歩いてきた。

その様子にルディは目を剥いた。そう、伯爵令嬢が目を剥いたのだ。バンダナがなければ美貌の令嬢のそのさまがどこからでも見れただろう。

本格的にどうしよう?!?!

こんなパターンは教えてもらったことがない!

相手が、超がつくほどフレンドリーに近づいてくる。このまま「やあこんにちは！」なんて言っただけさうだ。握手されそうになっただけしかえしていいのかしら・・・?

ええと、その場合は「ようこそ！私の領域へ！」でいいのか?! それでそのままバツサリ・・・って違う!

パニックになりすぎて訳が分らない。基本ルディは冷静だが、不測の事態に一旦頭がパニックになるとそのまま大暴走。

とりあえず回避行動を本能的に取るうとしてか、思わずじりじりと後退すると、相手は吃驚したようにその歩を止め、さっと諸手を挙げた。

「すまない、逃げないでくれないかな」

首を傾けた姿は大きな愛玩動物。あ、黒眼でつかい。じゃなくて！  
え、何これどうすればいいのかしら？どうすれば正解？はいはい  
！オーディエンス求めます！

結局動けないまま、男に後一步で向こうの剣が届く、という所まで許してしまう。自分の手は勿論剣の柄にかけてあるが、向こうはかけるそぶりすらない。なんとなく攻撃しにくい。  
相変わらずにここにこ顔の男は、殆ど口を動かさずにルディに聞こえる程度の声で言った。

「ドルトナンド家の方ですか？」

その言葉に驚く。そしてどう答えるべきか暫し思索した。軽率に答えては、自分の身が危ない。

すると彼は苦笑したようだった。

「警戒するのは尤もです。実は自分、ドルトナンド家には借りがございまして。」

そついつと腰の剣を外し、ぱいっとルディの方に投げてよこす。そしてすっと手を上げた。

「負けを認めます」

いっそ清々しいほどの笑顔に、会場はざわつきをなくし、しーんと静まった。

え、何？どういうこと？貴方以外理解できていないと思えますが？  
ルデイも完全に固まっていたが、青年はそんな事も気にせず、後  
で会いましょう、と不吉なことを言いながらくると背を向けた。  
本当にその後で会うことになり、そして思いもよらない形でルデ  
イとこの男性の関係は紡がれるのだが、それはまた別の話。  
そうして、ブーイングが起こる間もなく、その試合は幕を閉じた  
のだった。

令嬢、青年と戦う(?) (後書き)

そして次回は將軍様と戦います

苦手だけど戦闘描写がんばります

ありがとうございます。

令嬢、將軍と戦う(前書き)

改稿するかもしれませんが。

戦闘開始。苦手だけど・・・がんばります。

## 令嬢、将軍と戦う

皆様、ごきげんよう。

わたくし、ドルトナンド伯爵家次女、ルナディア・ドルトナンドと申します。

忘れられているような気がしてならないのですが、わたくしは伯爵令嬢なのですよ。

たとえ両手に剣を握りしめ、趣味と称して男装していようと。

ええ、バレなければいいと思います。バレなければオールオッケイなのです。

「お嬢様!！」

趣味のことはばれてますけどね。

「旦那さまがお呼びでございます。直ぐにお支度を」

分かってるわよ、分ってる。

どうせあのことよねえ。まさかこんなことになるなんて思ってもいなかった。

時はとかのぼしー

ルディは燦々と太陽の降り注ぐ地に足をつけて、ぼんやりと考えた。

・・・決勝戦とは早いものね。

というか、女の自分がこんなに簡単に勝ち上がっていいのだろうか。大丈夫か、この国の猛者。実は弱い集まりなのではないかと失礼なことを考えたのも、仕方がないことだろう。

目の前に腕を組んで立つ將軍閣下の素晴らしいまでに晴れ渡った笑顔も、それを助長させている。

「開始の合図が楽しみですな！」

いや、楽しみじゃないわ。

とてつもなく楽しそうな顔をする目の前の將軍閣下を蹴っ飛ばしてやりたい。ここまで楽しそうな顔をされると、なんとなく嫌だ。

先程ハバーニールと試合を繰り広げ、その末に宰相の息子殿を下したバーデールド殿。さすがに將軍だけあり、確かな剣の腕の持ち主である。

先の戦いではハバーニールと見事な力勝負を繰り広げていた。ま

さに闘技場に来る誰もが期待している、剣士同士の戦いだっ

笑みをたたえたまま、バーデールドは両手剣を引き抜いた。少し刃が広めだ。しかも長い。

これは、リーチの差を気をつけないといけないだろう。

・・・今日は筋骨隆々と戦ってばかり。正直骨が折れるわね。

はあ、とため息を漏らす。一応最低限のトレーニングは欠かしていないが、それ程体力に自信はない。

先程の戦いにおける、相手の疲労はどれほどだろうか。正直二三試合目は戦ったと言えない自分は、十分体力が有り余っているけれど。

それでもと、ここまできたのだからテルミアとの約束を果たそうと、決意を新たに腰から二刀を引き抜く。少し腰を落とし、左側を若干前に構える。

最初から全力。

体力面と力、この両面で男に勝てると思うほどルディは馬鹿ではない。だからこそ、頭を使って冷静に勝つための道を探すのだ。じつと見つめるその視線からは、バーデールド以外は排除される。闘技場の観客の声も、自分を見つめているだろう兄の視線もすべて感覚から取り除いていく。研ぎ澄まされた感覚が、痛いほど試合前の緊張感を拾い集めてくる。

わずかな自分の呼吸音ですら、かなりの音量となって耳を襲う。

『決勝戦を開始します。』

そのアナウンスに、二人の体は更に沈む。観客も一斉に静まる。そして。

『はじめる』

先に地面を蹴ったのはバーデルドだった。

両手剣を右側に構え、小柄な少年（実際は令嬢）に向かっていく。

これ、後で彼が知ったら後悔するかな。

先程の会話からも彼が見た目のダンディさ同様、剣馬鹿ではあるが紳士であるのも分かった。

そんな彼が、知らなかったと言えど令嬢に刃を向けるなど。

実際その通りで、彼女のことかばれて、平謝りされるようになるのは先のことである。

「じゅっ」

そのまま横薙ぎで来ると見ていた為、受け流そうと構えたが、まさかの突き。慌ててルディは剣先で無理やり弾き、相手の剣筋を変えた。更に剣を避ける為に右側に体を捻りあげる。

背骨が悲鳴を上げたが、この際構ってられない。

しかし彼女の姿勢の回復を待たずして、バーデルードの左脚が彼女の体をとらえようと振り上げられる。

軸足になっている右足は使うことはできない。

とつさに左脚で地面を蹴って体を精一杯逸らした。自分の鼻ぎりに足が掠めていく。剣を持ったままの左手をつき、転がりながら相手から距離をとる。即座に反動をつけて体を相手に向け直し、息を切らしながらルディは立ち上がった。

細かく何度も息を吐き、呼吸を整える。

表情だけ見れば、まだ冷静そのものではあったが、彼女の心情は―

ああああ、あぶなっ！

汗だらだらであった。

「あれを避けますか。さすがですなあ」

豪快に笑うバーデルドにルディは血の気が引く思いだ。

なんだあの突き。重すぎる。あれを何発も避けるなんて体が持たない。柔軟な筋肉だと聞いてはいたが、突きを弾かれておきながら蹴りをくりだすなんてどんな技だ。

剣を構えなおしたバーデルドが再び突っ込んでくる。ふっと息を吐くと、ルディも地を蹴った。何度も受けられないなら、早々に決めるしかない。

ルディの心は決まった。

正面から受け止めると見せかけて、横っ跳びに飛ぶ。しかし相手も百戦錬磨の猛者。素早い判断で突きから一閃の動きへと転換させる。

相手の獲物に狙いをつけた獰猛な視線に、背筋が冷える。

「っ、柔軟にもほどがある！」

口から思わず文句が飛び出る。左の剣を盾に一旦受け止め、素早く右側の剣で上から叩きつける。態勢を変える為に、ルディは素早く地面をけり、その反動で相手の剣の上を舞う。ぎよっとしたようにバーデルドは目を剥いた。

戦場や騎士には、剣を飛び上がって避ける人間などいないだろう。しかしそこはドルトナンド家、身軽なものには身軽な避け方を！をモットーにルディの身体能力は異常レベル。

剣を乗り越え逆側に着地したルディは、一閃を放つ。相手も体を捻って避け、その身を守ろうと剣を体に引き付ける。

それを好機とばかりに、その剣に連撃を加えていく。一、二、三、四、五。二本の剣から放たれる剣戟は、高い音を立ててバーデルドの剣を追い立てる。

ずりり、と相手の足がルディに力負けして下がっていく。

そこで初めてバーデルドは冷や汗をかいた。

剣を折る気がーと。

正直量産品としか言えない闘技場の剣がどこまでこの剣撃に耐えられるのか、バーデルドには見当もつかない。

しかし相手にはそれが分かっているのだろうか。更に力を込めて一点を突いてくる。少しでもずらそうとバーデルドは体を動かさうとするが、何分相手の攻撃が早すぎる。

どんな観察眼なのか知らないが、剣を受け止めようと動かしたところは必ず狙われている一点。一点だけを狙われているからこそその焦りだった。

これはーまずいのでは。

バーデルドは、かっと目を見開いた。

「うおおおおお！」

バーデルードの野太い雄叫びと共に強く剣が強く押し出される。

ギーン！

突きの威力が無理やり相殺される。ルデイもそれ以上は深追いせず、軽い動きでバックステップを踏み距離をとる。

その細身のせいかパワーは足りないが、ルデイのスピードと正確さはそれを補って余る。バーデルードの無理やりの打破は正直賭けだった。

ぶん、と剣を振り、バーデルードは三度剣を構えた。その顔には汗が流れ、しかしその瞳には好敵手と巡り会えた喜びが溢れている。彼は構えたまま、口を開いた。

「なんといいですか・・・あなた程の剣士を知らなかったことを恥ずかしく思いますな」

「私は剣士ではないのですよ」

先程より高い声は、するりとバーデルードの耳にはいりこむ。ルデイのその返答に、バーデルードは顔に笑みを刻んだ。

「ならば私が今からあなたを剣士と呼びましょう、テルミオ」

ルデイは目を細めた。

伯爵令嬢の自分が、剣士と呼ばれることはないと思っていた。日向に出ないことを望んだその時に、令嬢としての自分、剣士にもなれない自分となった。

自分の剣を、家族以外が認めてくれたことが、それを認めてくれたのは兄が認めた男性であったことが、嬉しかった。

細く笑むと、ルデイは再び、地面を蹴った。

令嬢、將軍と戦う(後書き)

ありがとうございました！

更新が遅くて申し訳ないです。

令嬢、將軍と決着する（前書き）

やっと闘技場終了・・・かと思いきや。  
あの方が重い腰を上げます。

## 令嬢、將軍と決着する

剣を握り直すと、再び、滑走。

慣れない、普段より重い剣。しかしそれは相手も同じ。そこにしか付け入る隙はない。

先程は引いたが、今度は引かない。

右手を振り上げる。剣が空気を切り裂き、唸る。相手の剣がそれを受け止め、高い音が鳴り響く。

気合いの声と共に左の剣を押し出す。またもや弾かれるが、素早く踏み込み、再びの右。相手が思わずという具合に一步後退した。

まだ。

まだいける。

いつもより重い剣に、右肩が軋んだが、そんなことはもう気にしていられなかった。

左脚を踏み込み、体を捻り、剣を唸らせ、再び逆の剣を放つ。再び相手が後退。

唸り声を上げてバーデルドも気合で踏み込もうとしてくるが、それを体を回転させていなす。ルデイの動きはそれこそ剣舞のよう

であった。

次々と変わっていく姿勢。急激な動きに足が、腕が、剣が、体中が限界を訴えた。ルディは歯を食いしばって耐える。次々と変わる視線に、研ぎ澄まされた感覚に、神経が焼き切れそうだ。

半回転して無理やりの一閃。

腕の筋肉が引き攣り、それでもと突き出した腕が嫌な音をたてた。気合いの一撃の機能が。ガキン、と重々しい音。相手の剣が微妙に逸らされる。

ルディはその碧の目を煌かせると、相手の懐に飛び込んだ。

バーデルードの反応も速く、剣を引きよせ、ルディの首筋に狙いを定めた。

剣が空気を切る音が、いやに耳に届き―

「そこまでだ！」

ぴたり、と両者の動きが止まる。

同時にあふれ出す、汗。

バーデルードの剣は、ルディの右の肩に触れるか触れないかの位置に。

ルデイの剣は、ぴたりとバーデルードの太い首筋に。

「將軍、貴殿の負けだろう」

ゆるりと笑い、両者の動きを止めた号令をかけたのは。

「王……」

バーデルードは眩き、剣を引いた。

「楽しかったぞ、テルミオ殿」

にこり、と笑ったその顔には、負けたことへの悔しさなど微塵もなく、ただその試合を終えたことへの喜びが溢れていた。

ルデイも微笑み返す。こんなにも辛い試合は、兄との対戦ぶりだ。

だが、楽しかった。久々に自分の限界に挑戦できた気がした。

「もしもその剣が、あなたのものではあれば私は負けていたでしょう」

剣を折るような素振りが効いたことも、その剣を無理やり弾くことも、彼のその手に慣れたあの重い愛剣ならばなかったであろう。なれない剣だからこそその隙だったのだ。

「それはあなたも同じこと」

バーデールドは剣をおさめると、そう言った。そしてもう一度微笑み、その胸に手を当てると、一礼をする。そして踵を返して退場していった。ルデイもその背を視線で追い、その後剣をおさめた。そしてどこかで見ているだろうテルミアを思う。

・・・これで、約束は果たした。母君の形見を渡してやれる。

ほっとした。まさかここまで辛い試合になるとは予想していなかったし、優勝できるとも正直思っていなかった。まあ結果としては優勝したわけで、これで万事解決だ。

『以上を持ちまして、決勝戦を』  
「待っていてくれ」

アナウンスを遮ったのは、またしても。

「王！何をー！」

兄の声だ。ああ、向こうを見たくない。本当に見たくない。どうしてもどうしても見たくないっ！  
ざわり、と観客にも動揺が広がる。  
おそるおそる振り向くと、闘技場のビップ観覧席から王が飛び降りてくるところだった。

彼は着地すると、優雅に歩いて向かってくる。どういっつもりなのか、視線で訴えると彼は笑んだ。

初めて近くで見ると王は、フェロモンただ漏れの美青年だった。艶のある黒髪、ややなだらかな線を描くその瞳に嵌めこまれた、宝石のような濃い紫の瞳は、光の加減でダークなその色彩から鮮やかな色合いへと変わる。その容姿は、道を歩けば後ろに行列ができそうなものだ。

黒と白が主の、金の装飾がされた豪華な服は、彼が王だということとをまざまざと表している。襟にある鷲の紋章が、やけに目に焼きついた。

面倒くさいことになるのが必須なので、是非関わりたくないと思っていた人種なのだが。一体どういっことなのだろう。

「貴女のこととは、知っていたよ。てっきり本当に病弱なのだとはかり思っていた」

意味深な笑みを浮かべる、王、レーナルト。

一気に体が冷えた気がした。

ばれている。兄がばらしたのか。いや、そんな筈はない。彼はルデイが社交界にでないことも、王族貴族と関わらないことも了承している。では、どうして。

再びルディに意味深な笑みを送ると、彼は声を張り上げた。

「前回大会の優勝者として、この者に試合を申し込む！」

・  
・  
・  
・  
・

はあ  
ああ  
ああ?  
ああ?!

令嬢、將軍と決着する（後書き）

ありがとうございました！

この3週間、休みがなくて笑うしかないです。

今週末までがんばry

まだまだ二人の絡みは遠いですが、頑張って進めていきたいと思  
います。

令嬢、陛下と戦う(前書き)

陛下が出てきた途端、おかしいな、コメディ化？  
陛下が笑う変態キャラになりつつあります。

## 令嬢、陛下と戦う

「どじいじいもりです！王！」

兄が身を乗り出すようにして声を張り上げる。その顔には焦りがありありと浮かんでいる。彼も自分の正体にはとっくに気づいているのだろう。

その彼を見据えた王は、言葉もなしに視線だけで兄の言葉の続きを遮った。強い意志を湛えたその瞳をむけられ、その口を閉ざしてしまわない者などいない。臣下であれば、尚更。

ぐっと言葉に詰まった兄が、心配の籠った視線を自分に向けた。その瞳を見返す。

もう、ばれているのだ。逸らしたりはしない。

大丈夫です、兄さま。事情はよくわからないけれど、私は王であるうと負けるわけにはいかないの。

ドルトナンドの娘として、負けることなんて大嫌い。それも今は人の大切なものを抱える身だもの。テルミアの涙にぬれた顔が脳裏を掠め、ルデイは剣を握る手に力を込めた。

『し、しかし国王陛下、』

「別に商品を横取りしようという訳ではないよ。ただ、試合を望んでいるだけだ」

前回の優勝者なのだから、実力は十分だろう？と司会の男性に問いかける。彼もまた、言葉に詰まったようだ。そのまま了承をもちぎ取った王は、ルデイと視線を合わせる。

今の自分の視線は、きつと疑に満ち溢れているはずだとルデイは確信している。その視線を向けられてもなお、気分を害した様子もなく彼は微笑んだままだ。

まったくもって理解できない。なぜ自分と試合を。

王は微笑のまま首を傾けて見せた。フェロモンただ漏れ。本人は自覚があるのかなのか。ルデイは思いつきり顔を顰めた。仮にも王に向かって、という気持ちは彼女の中にはもうない。

・・・ごまかそうだったってそうはいかないわよ。

「どうして私と試合を」

「そうだな、私に勝ったら教えようかな」

「全くもって私にメリットがないですね」

すると王はさらに顔を崩して、ルデイを見つめた。その目には好奇心がありありと浮かんでいる。自分の提案を受けたくない、と全身全霊で訴えるルデイが面白くて仕方がない、といった具合だ。

「私との試合を断るといふのか？」

「できるなら」

「この状況を見ても？それをいうのか」

ルデイがはっとしたように周囲に視線を巡らす。自身に集まっているのは、好奇と期待の混じった視線だ。

先程異常な試合を展開して見せた優勝者と、前回優勝者の試合を

見たいとー

信じられない！

知らないうちに追い込まれてるじゃない！

一気に顔色をなくした令嬢に対して王は涼しい顔で迫力抜群のスマイルを放った。

「この視線から逃れるのは、私でも難しいな」

確信犯か！！

ルディはびきびきと嫌な音を立てる米神の血管にはなんとか気付かないふりをした。

王に対して感情のままに行動すれば、血管どころか首が切れる。試合しようとしている時点で首が危ないのでは？と根本的なところからいろいろおかしい気がしたが、彼女の頭は既に許容量オーバーで、それ以上頭が回らなかった。

黙っているルディに王は了承と取ったのか、剣を構えた。その顔は未だ笑みを張り付けたまま。

何がそんなに楽しいのかさっぱり分からない。ルデイがこんなに怒りを覚えたのは久方ぶりだというのに。

『は、はじめっ』

若干困惑したような司会者の声が、闘技場に響き渡る。まさかの特別試合に、観客の熱気は否が応でも上がっていく。歓声が闘技場を満たし、それでも足りないかと外にまで溢れ出す。まるで自身を押しつぶさんばかりの声に、ルデイはその身を固くした。

・・・本当にどうしてこんなことに？

テルミアの願いを聞き入れたのは自分。ここまで勝ち上がってしまったのも自分。あとは商品を受け取って、テルミアに渡せばそれで私は私の騎士道を全うしたことになるはずだった。

しかし、その自分の、なんとか何事もなく、ばれずに終えようとしていたその道を遮るこの国のトップ。

しかも今までなるだけ王族どころか貴族すら避けてきたルデイが初めて見た、兄に匹敵する美形。王族は大体皆美形だと聞くが、全員が全員こうなのだろうか。

ルデイは正直美醜には興味がないが、とにかく、面倒事には関わりたいくなかった・・・筈だったのに。

「どっぞ」

剣を軽く構えたまま王がほほ笑んだ。それはもう、闘技場の淑女たちからあられもない赤い液体が噴き出す程の、フェロモン全開スマイルで。実際どこらかしこで嫌な音や、色が見えた気がしたが、気にしないことにしよう。それがいい。突っ込むなんて本当はいやだけれど。

「遠慮しないわよ」

女だとばれているなら、もう、女の口調で。

ルディはその目をすっと細めると、剣を構える。しかし、構えた両の手の筋肉がひきつるのを感じる。とうに限界は超えているのだから仕方がないが。

引く道もないのに、どうしろというのだこの腕は。

こういう時、女だということをまざまざと思い知る。足りないのだ、男に比べて何もかも。信じられないような訓練を超えてなお、何もかもが足りない。

そう分かっていても、ここで引くのは完全にそれを肯定してしまうような気がして、ルディは自分すら知らずのうちに、恐れた。だから普段ならしない筈の突撃をかける。

両の剣を構え、低姿勢で突っ走る。地面を蹴る足の感覚はすでに鈍い。

しかしそれでも地を蹴り、右の腕を唸らせ剣を突き出す。

レーナルトの長剣がそれを難なく受け止める。ちっと舌打ちをしたルディは、右の手を払うと同時に今度は左の剣を突き出した。剣

が空気を切り裂き、レーナルトの喉元を正確に狙う。

素早くレーナルトの剣が下段から放たれ、ルデイの剣が逸らされた。あまりの勢いにルデイの体がもっていかれる。若干浮いた体を捻り、体を縮めてごろごろと転がりながら距離をとる。

片膝を立てて剣を構えた彼女を、王が首をこてんと傾けて見つめてくる。

「だめだよ、舌打ちも、転がるのも。綺麗な体に傷がつく」

「・・・そうさせているのは誰よ」

困ったように眉根を寄せる王に、ルデイが鋭い視線を向ける。彼女の目は完全に据わっている。

普通なら視線をそらしてしまうその剣呑さに、しかし王は目を輝かせた。心なしか、いいな、なんて呟いているのが聞こえた気がしたが、いや、嘘だ。聞こえない聞こえない。

ルデイは聞こえない振りをそのままに、剣を構えなおした。途端レーナルトが一気に距離を詰めてきて、思わず息をのむ。

最初の1打は両の剣でなんとか凌ぐ。しかし直ぐに踏み込んだレーナルトの剣が、再び彼女の胸元を狙って迫ってきた。

弾いても弾いても柔軟に、縦横無尽に攻めてくる王の剣に、ルデイは凌ぐだけで必死だった。両の剣を使ってでしか弾けない相手の剣に、ルデイの足が、一步、また一步と下がる。

秀麗な顔がにこりと笑ったのを確認したと思った次の瞬間に、両の手に衝撃が走る。本能的に体の前で防御の体制をとった剣に感じるのは相手の長剣と彼自身の重さ。

なんて、重い剣。

先程のバーデルドの剣は、確かに重かった。それは剣自体の重さと、相手のパワーだ。けれど今受け止めている剣は、剣自体の重さというより軸の重さだ。そして彼自身の――

「……っ」

腹に力を入れて、耐える。彼の輝くスマイルが見えた。そのいっそ清々しいほどの笑顔に腹の底が煮えくりかえるのではないかと、と思った。

ここで火事場の馬鹿力でも出て気くれないかと期待したが、残念ながら、その怒りからはそれは出てこなかったようだ。

まずい。

腕が下がってきた。じりじりと追い詰められていく。ゆっくりと彼女の腰が地面に近づき、長剣を支える両の剣を持つ手がかたかたと震えた。彼女の白磁の頬を、汗が伝っていく。

息が辛くなり、筋肉が悲鳴を上げた。

腕が落ちる！と思った途端に剣が軽くなり、はっとして地面を蹴って後退する。

手を抜いたのかと、しかしその隙を逃さずに素早く距離をとった自分の防衛本能に呆れつつ、レーナルトを見た瞬間に再び彼が目の前に迫る。

ぎよっとして構えた剣を弾かれる。その衝撃に肺から空気が押し出された。

「かはっ・・・」

思わず片目を瞑った彼女の足が目にも止まらぬ速さで払われ、地面が目の前に迫った。

ぶつかる！

本能的に目を瞑った彼女だったが、怖れていた衝撃は訪れず、おそるおそる目を開ける。

体に回されるがっしりした腕。これ以上ないほど近いフェロモンの溢れる笑顔。

「嘘だあー・・・」

いろいろと信じたくない。負けたことも、この状況も。

視線を散々に散らした揚句、現実逃避しかけたルディをアナウンスの声が引き止めた。

『ええつと・・・陛下の勝利です』

しん、と静まった会場は、次の瞬間に沸き立った。ルディは耳を塞ぎたくなるようなその声に、嘆息し、負けたことは負けたのだから仕方がない、と立とうとしたが、なぜか体が動かない。つこうとした手も空をかくばかりで、地面に届かない。

思わずあれ？と眉を顰めたが、未だ体に回された腕に思い当たり、思わず王を見上げた。そしてすぐにそれを後悔した。

蕩けんばかりのその王の笑顔に、さつと目を逸らす。

え、何？どうなってるの？なんでこんなに笑顔なの？

ぐるぐると回る思考に、ルディが困惑していると体が不意に宙に浮いた。あつという間に遠くなる地面との距離。信じたくない、と心から思ったが、どうやら自分は陛下に、その、横抱きにされているらしい。

先程まで握っていた剣はいつの間にか放り投げられて、手が届くところにはなかった。しっかりと抱え直されて、ここまで男性に密着したことがないルディは、思わず体を硬直させた。

しかしなんとか気を持ち直し、王の固い胸板に手を突っ張って離

れようとものがく。顔に血液が集まるのを感じて、必死に首を反らした。それをかわいい、などとレーナルトが見ているとも知らず。

「は、離してください！」

「いやだ」

間を置かずに返されたその返答に思わず瞠目する。なんていった？この人。いやだ？いやだって何？

信じられないと言わんばかりに硬直するルディに視線を一瞬落とすと、レーナルトは司会者にその視線をやり、声を張り上げた。

「この試合は特別だ。私は正式な参加者ではない。勿論商品はすべてこのテルミオに譲渡されるものとする！なお、彼は足を挫いたため、私が運ぶ！門を開けよ」

何度目を見開かせればいいのかのさう。思わず足など挫いていないと声を上げそうになったルディだったがレーナルトが視線を再び視線を落として、にっこりと笑うととんでもない爆弾を投下した。

「何か言おうものなら、その唇を塞ぐからね」

僕のでね、と艶を滲ませて言われた為にルディは開きかけた口を速攻で塞いだ。そして悠々と歩いて行く二人は、観客の盛大な拍手に見送られて扉をくぐる。

それを反対側の客席で見っていたルイザスは唇を噛みしめた。握った陛下の座っていた椅子の背もたれに、指が食い込み、今にも椅子からその柔らかいクッションを千切り取らんばかりだ。

その腕には血管が浮かび上がり、怒りで全身がふるぶると震えている。

ルイザスはその血走った眼を近くにいた同期たちに向けた。思わず一歩二歩と後退する同期を責めることが誰にできたろうか。

怒りのオーラを迸らせるルイザスは元々低音のその声を更に低くして、同期に言い放った。

「すぐに陛下を追いかけるぞ！」

こくこくと頷く同期の何割が、彼の本心を悟ることができたのだろうか。その姿だけ見れば、君主の勝手な行為に怒り心頭の近衛の姿だが。

（私のルナディアを全力であの狼から守らねば！直ぐに行くぞ、ルナディア！）

可愛い妹を主君から守ることしか、その時の近衛筆頭の頭にはなかった。

令嬢、陛下と戦う（後書き）

陛下 変態かつ狼

近衛筆頭 シスコン

令嬢 羊

そんな感じの話でした。

陛下、令嬢に求婚する（前書き）

陛下のターン。

ルナディアの運命やいかに。

そして陛下が出てきた途端文章の方向性が迷子に。  
コメディ？！なのでしょうかこれは。

陛下、令嬢に求婚する

レーナルトが満足げな顔で門をくぐつたのを、誰一人として止めることはなかった。まっすぐに闘技場の医務室へ連れて行こうとするその姿に、闘技場の誰もが道を開ける。

お願いだから、見ないでください。

もうこれ以上は赤くならないと思えるほどルディの顔は赤かった。一応今の格好は男だ。周りにどう見えているかを考えたくないし、何より。

（よよよ横抱きっていつかお姫様だっこっていつか、もうやだ、こ

れ！)

社交界デビューもまだ、というか見事にさぼっただけなのだが、のまさしく蓄というに相応しいルデイにとって、しかも女性を守ることを念頭に置いて生きてきたが故に、自分がここまで女性として扱われていることが、信じられないくらい恥ずかしい。

そんなルデイにちらちらと視線をやりながら、レーナルトはまた顔を蕩けさせた。その美しさからルイザスのように冷徹に見える容貌だが、くるくると変わる表情のなんと愛らしいことか。

どうやって開けたのか、医務室の扉をルデイを抱いたまま開け放ったレーナルトは、ぽかんと口を開ける医者に、笑顔のまま「出ていけ」と言い放った。

それこそ剣士顔負けのスピードで医者は素早く立ち上がり、その白衣をはためかせながらびゅんっとならぬ効果音がしそうな程のスピードで駆けて行った。

「……………」

あれ、二人きり？

しかも先程と同じような艶のある笑顔だ。先程まで医者が据わっていた椅子に、ゆっくりと下ろされる。どうすればいいのかわからず、おどおどと視線を彷徨わせる。しかもこの空気もなんだか気まずい。

なんとか意を決して顔を上げようとした時だった。

耳に響いた水音に、ルデイはその身をこわばらせた。

ちゅっと小さなリップ音を残して、顔の横にあった熱が離れていく。

「・・・」

思考停止。

ぎざぎざ、と音を立てるかのように向けた顔と、楽しくて仕方がない、といった様子の陛下の視線が絡み合う。

無言。ひたすらに無言。

「ルナディア！」

兄の切羽詰まった声とともに、扉が壊れるのではないか、と言わんばかりの勢いで扉が開け放たれ、王の近衛たちが駆け込んでくる。その瞬間に時間が動き出したかのようにルディは素早く席から立ち上がると、兄めがけて走りだした。

一瞬驚いたように王は目を見開き、思わずルディにその手を伸ばすがあえなく宙を掻いただけだった。

ルディは勢いのままに兄の服の裾を掴むと素早く兄の背後にまわって、その身を隠すかのように縮こませた。彼女のその姿に、ルイザスはぎよっとし、そしてルイザスとルディの関係を知らない、それどころか男だと思っている近衛達は、それこそ目をひんむいた。

あのルイザスになんてことを！と顔を真っ青にしたが、全員が顔を真っ赤にしてルイザスの背に隠れる彼に、手を出しあぐねている。いや実際は彼女なのだが。

助けなければ、と思うのだが、なんとというか、愛らしすぎて手を出せない。しかも出したら殺される気がする。誰に、とは言えないが、近衛達の本能は確かにそう告げていた。

「ルディ！どうした?!」

ルイザスには既に冷静さなどなかった。彼女の愛称を呼び、その顔を真っ青にした。

おお、あの顔色って何？といわんばかりのルイザスの顔が青くな

つているぞ。と、どこか他人事のように考える近衛達。もう現実を見たくない、とだれもが心から思っていた。

ルディはそれこそもうルイザ以上に混乱していた。顔を赤くしたり青くしたりしながら兄の顔を潤んだ瞳で見上げた。

「み、みみみ、耳が・・・！もうお嫁にいけな・・・！！」

「「僕（俺）がいるから心配はいらない」」

同時に放たれた言葉に固まったのはルディだけでなく近衛もだった。一斉に全員が固まったが、当の本人たちはそれに全く気付かず火花を散らしあっている。

背後に虎と竜を背負った二人は、その視線だけで威嚇し合っている。そのまま食いつかんばかりに格闘を広げる虎と竜の姿が、ここにいる全員には見えているようであった。

なんとなくルディはそろそろと兄からも離れ、さっと近くの近衛の後ろに移動したが、怒りのあまりルイザは気付いていないようだ。

「王・・・貴方、わたしのルディになんてことを・・・！！」

他を圧倒するオーラを放ちながらそのまま腰の剣に手をやることしたルイザスを、仲間の近衛が羽交い絞めにして止めた。

「ルイザス！落ち着きなさい！不敬罪どころか反逆罪に問われます！」

「知るか！こいつは、この馬鹿は……！！私のルナディアに……！！！！！！」

ここにいる全員を殺さんと言わんばかりのルイザスの剣幕に、近衛達は一樣にまた顔を青くした。もう彼らに血が残っているのか不思議だ。

とにかくルイザスは息を荒くしながら主君に対して怒りのオーラを迸らせている。この時点で反逆罪と問われてもおかしくない。

しかし勿論レーナルトの方にもそんなつもりはないらしく、ただ気に食わないと言わんばかりにルイザスを見つめて鼻を鳴らした。

「誰が、お前のルデイだ」  
「ルデイは私の妹だぞ！」

しーん。

「……すまん、ルディ、ばらした」

完全にね。

「に、兄さま……」

私の努力。確かに途中から無効だったけれど。兄さまと途中から呼んだこととか。王に女だとばれていたこととか。

「ええ?!妹君?!!確か、体が弱くて社交界にも出られないんじゃないんじや……」

驚きの声を上げた近衛達に、ルディは居た堪れなくなって更に体

を縮こませる。

「さっきの試合を見る限り、健康どころか丈夫そうだな」

楽しげに言つてのける王の顔など見たくもない、とルディは気ま  
ずさも相まって顔を背けた。

「しかしルディ、なぜそんな男の後ろに隠れている」

許さない、と言わんばかりにその瞳を細めるレーナルトに、ルディはぶんぶんと首を振った。彼女以上に青くなつたのは彼女が盾にしている近衛で、二人の鋭い視線を真正面から受けて諸手を挙げた。そんな事は気にせず、優雅に、そして素早く歩いてきたレーナルトはルディの手を取ると跪いた。一国の王が、一人の少女にだ。絶句した臣下たちがその行動を止める間もなく、レーナルトが口を開いた。

「ルナディア、気に入った！僕の妻になってくれ」

羽交い絞めにされて何事かを叫んでいたルイザスまでもが息を呑んだ。近衛達は、もう開いた口が塞がらない様子で、彼らの顎と血圧が心配である。

そしてルイザスが叫び声を上げようと口を大きく開いた―

「きっ……!」

思いつく限りの罵倒を主君に浴びせようとしたのだが。

「絶対にお断りします。いやです」

それよりも先に彼の妹が真顔で王の顔を見つめ、彼の求婚を一刀  
両断し―

逃げた。

陛下、令嬢に求婚する（後書き）

ありがとうございました！

二人の絡みは始まったばかり。

どちら陛下は令嬢にでれでれになりそうです。

これにて闘技場編は終了です。ありがとうございました。

令嬢、父と会う(前書き)

舞踏会編開始です。

よろしくお願いします！

## 令嬢、父と会う

「お嬢様、そのようなお顔でお父上に会うおつもりですか」

「悪いわね、常にこの顔なの。生まれた時から」

「そういう意味ではございません」

時は元に戻り、闘技場での大会から2日後のドルトナンド伯爵家。

びきり、とドルトナンド家執事トゥーランドの額に青筋が走る。

彼の眼が眼鏡越しにすつと細められ、その顔から怒気が溢れだした。さながら負のオーラのようなそれに、くいと眼鏡を押し上げる動作は魔界の宰相のようである。

ドルトナンド家に仕え初めてそれこそ28年になるトゥーランドは、一言で言うなら生真面目であった。彼で3代目となるこの家の執事の名を継いだのは、今から3年前。彼が25歳というとてもなく若い時だった。

「僕は、妻と田舎に籠ろうと思うんだがね」

「そうか。愛妻家なのはよいことだ」

「それでな、執事職をトウーランドに譲ろうかと思うんだが」

「ほお」

このなんとも気の抜けた当主と2代目の会話が皮きりだった。

彼は上の兄と10歳差で、二代目が46の時の子だ。

その時点で71歳の2代目が引退するのは年として相応だったが、その時、兄は既に他国で業績をおさめたため、本国には殆どいない。まるで渡り鳥のようにある時期にだけ国に帰ってくるというある種の放浪息子振り。

ドルトナンド家にとって、執事は勿論重要なポジションだ。そう簡単に縁のないものに渡すわけにもいかない。しかもドルトナンドの子供たちは、色んな意味で一筋縄ではいきはしない。

だが、彼はその時点で長女ジェステイナと幼馴染だったこともあってか、子供達にいいように振り回され、しかし抗い、事後処理を行うその様を長くあたたかい目で見られてきた経歴の持ち主。

2代目は言った。

それこそ子供の時から壮絶な運動神経と根性とを誇る子供たちを相手取るのに、老人はちときついーそれに比べて、みよ、トウーランドの負けず劣らずのあの体力と根性を。

この2代目の丸投げ発言も相まって、彼の就任は無事決定した。先にも述べた通り生真面目な性格である彼の神経は、この3年常に綱渡り状態だ。

彼の纏う空気が、自然ぴりぴりとしたものになるのは仕方がないだろう。

しかしそんなことには気づいていないこの家の次女、ルナディア・ドルトナンドはフーンと顔を逸らし、ふてくされた顔をしたままだ。この家の主であり、ルディアの父であるジムナス・ドルトナンド伯爵に会うために二人は長い廊下を歩く。ルディアの姿を見て、メイドたちは首を垂れていく。

それをルディアは手を振って拒否し、仕事に戻るよう指示をする。しかしそれが終わればむっとりとした顔に再び戻った。

それを視界の端に確認したのだろう執事は、重い溜息を零した。

「ご自分で招いた種でしょう。もういい年なのです。回収もご自身でなさるのが当たり前でございます」

「分かっているわ、だけど・・・」

何を言われるのか分からないから恐ろしいのだ、とは言えなかった。

呼び出された理由に思い当たりすぎる。いつそ全てなのだろうか。不安のあまり無言になってしまったルディを咎める事はせず、トウランドは歩みを進めた。

それに従いながら1日ぶりと言えど着たドレスはコルセットがきつく、やはり男装の方がいいとルディはそつと息を吐いたのだった。

「さあお嬢様、どうぞ」

下げていた視線を上げて執事の姿をとらえ、次いで執務室の扉に視線を向けた。何か壮絶な乱闘の後があっただろうと思われる扉の横の壁は、くたびれている上にとこるところ壁紙が貼り直されて真新しい箇所がある。

この家の者はそれが歴代の夫婦喧嘩の痕だとしてっている。この部屋でただ妻が喚き叫んだり、夫が妻を窘めるだとか、もしくはどなり散らすという有りがちな喧嘩が起こった事はないだろう。

冷たく笑う妻の手に握られているのは良くて包丁、悪ければ代々伝わる暗殺用の剣。

特に曾祖父が余りに女性を大切に愛で過ぎて、妻であった曾祖母との間に巻き起こったのはまさに戦争――

この部屋で起こった修羅場だけでも一つ伝記が書けるだろう。いや、伝奇か。

しかし大抵この扉の前に初めて立ったものは、一様に首を傾げるのだ。

どうして、この壁はどこどころ真新しいんだい。

それはね、夫婦げんかで何度も傷がついたからさ。そりゃもう皿は飛び、壁は抉れ、ひどい時には血肉が、

・・・そうかい。もういいよ。よくわかった。

この会話も、この扉の前ではもう珍しくはない。そんな若干笑い話（当人たちにとっては笑い話ではないが）の曰くつき扉だということに、こんなにも重い空気を纏ったものに思えたのは初めてだった。最近はずいぶん男装にも諦めてもらい、ミスもなくきていたというのに。どうして、と一昨日から何度も心の中で反復している言葉をもう一度呟く。今すぐ悶絶したい気分だが、伯爵令嬢がそんなことをするわけにもいかず、ルディはぎりぎり歯を食いしばった。

ドアノブにかけられた執事の手がゆっくりと回りー、かちやり。

扉を開けて待つ執事を一瞥し、ルディは促されるままに執務室へと歩を進めた。

「ルナディア、加減はどうだ」

「ええお父様、もうすっかりですわ」

「相変わらずの回復力だな。誰に似たんだ」

「精神はお母様、体力はお父様が私に無理やり、ですな」

「そうだな、そうだったかもしれないな」

ふつと若干遠い眼をする当主ジムナス・ドルトナンド伯爵は手に持っていた書類を横に置き、正面にあつた執務物を左右に避けると肘をついてルデイに向きなおつた。

彼の髪は代々、というべきか、殆どのドルトナンド家血族がついでいる銀髪。瞳は濃いヴァイオレット。年齢を重ねたその顔には皺が刻まれてはいるが、今なお鍛え続けているその肉体が衰えていることはない。ぴたりとしたラフな執務服は、彼の引き締まった肉体を形どっている。

ルイザスやルデイとは違う、穏やかな目元をしている彼は、口元に蓄えた鬚を指で摩りながら、どうしたものか、と呟いた。そして眼を伏せると、無言になってしまった。

寝ているのか、と疑いたくなるような穏やかな空気が彼の周りに漂っている。この性格だから燃え盛る火のような母とやっていけるのだと思うが。

ルデイも話の続きを聞きたくない余りに、黙り込んだままだ。窓の外から僅かに聞こえてくる鳥の鳴き声が、まるで昼寝時のような

空間に更に拍車をかける。

ぴくりとも動かない当主と、眼を若干背けたまま姿勢だけは凛として立っている令嬢に、扉の傍に静かに控える執事。今の状況はさながら絵画であった。

「っごほん!」

その空気を断ち切ったのはいつものことながらの苦勞人、トウーランドである。

「それでな、呼び出した件なのだが」

先程までの無言を露とも感じさせないなめらかな口調で、目を伏せたままのジムナスが言葉を発した。

「はい」

「まあまずな、今回のお前の不手際についてだ」

忘れないように書いたのだ、とデスクの左側に置いてあった紙を引つ張り出すジムナス。その瞬間に、ざざざつと上に積み上げられた書類が彼の目の前に滑り落ちる。

「……………」

無言でそれをいそいそと寄せて積み上げる。元よりもさらにぐちゃぐちゃになつた書類たちは若干哀れである。

それ重要書類です！と思わずトゥーランドが口を開こうとしたが、優秀な執事は開いただけでとめて見せた。

ごほん、と一つ席をしたジムナスは紙に目をやり口を開いた。

「まず、座学から逃亡を図り、再び男装して城下に赴く。まあ、これはいつものことだな」

「旦那さま、いつものことでは困りますよ」

「そうだな、トゥーランド。お前から言つて聞かせてくれ」

「それができたら苦労しません」

「ふむ、しかしそれがお前の仕事だ」

ぐつと言葉に詰まったトウーランドを優しげな一ある種いじめつこのような目で見つめたジムナスは続ける。

「少女を助ける、ふむ、これはよい。しかしその後闘技場に出たとは・・・当家でもそんなことは異例だぞ」

「・・・申し訳ありません」

「あげくそこで優勝するとは。ちまたでお前がなんと言われているか聞いたか。謎の剣士だぞ、まったく捻りもないな」

「付け足しますと、どこぞの貴族の御息だとか、もしくは凄腕の傭兵、暗殺者、他国の密偵、あげく亡霊である、というのも囁かれています。好き勝手言われておりますね」

「・・・」

「まあそれはそれとして」

いいのか。

「王と戦ったそうだな、負けたそうじゃないか」

「・・・はい」

「お前はなぜ社交界に関わりたくない、というせにそんな面倒筆頭と会うのだ。実際のお前はこんなにぴんぴんしているというのに、

病弱とまでいって匿ってやり、あげく男装もある程度許可している  
というに」

「返す言葉もございません」

「いや、一番問題なのは負けたことだ」

片眉を吊り上げるジムナスにトゥーランドが目を見開く。

「どうだ、王は強かったか」

「旦那さま！」

「はい、私では力不足でした」

「そうか、是非私も一度・・・頼んでみてはくれな」

「旦那さまああ！！！主旨が違います、主旨が！！！」

「それでな、続きなのだが」

何事もなかったかのようにルディとだけ目を合わせて話を進める  
ジムナスに、はあはあと息を切らす執事。

「お前は自分の立場もわきまえず問題行動をしすぎた。故に謹慎を命じるつもり」

ああやっぱり。さすがにやりすぎたわよね。これでも伯爵令嬢なんだもの。謹慎になって当たり前・・・

「だったのだが、招待状が届いてな」

「「は？」」

執事と令嬢の声がかぶる。

「差出人はレーナルト・シュナンベルム王。二週間後に王城で舞踏会を開くから、お前に参加しろ、と」  
「断ってください」

ルディは即答する。あまりの素早さに一瞬ジムナスも言葉に詰ま

り、まじまじとルデイを見据える。彼の娘の眉間には深い皺がより、体からは拒否のオーラが出ている。

そんなにも王が嫌なのか、とジムナスはややレーナルトに同情した。彼にはそういう人に執着する感情が欠如している、とルイザスが言っていたが、どうやらそうではなくなったようであるし。

ルイザスと同じで、ただ一人の娘に対してのみ、のようだが。罪作りな娘だなあ、とこっそり苦笑した。

「姉さまがいけばよろしいではないですか」

「ジェステイナには既に届いておる。旦那と共に行くそうだ」

「わたくし、社交界デビューしておりませんし」

「これをデビューにしるということだろう」

「流行のドレスなど・・・」

「残念だが、お前大好きの侍女たちが普段からたっぷり用意しているから事欠かない。まあそろそろ御針子を呼んでいる頃だろうが」

「知り合いもないので不安です」

「どの口がそれをいうんだ？」

「・・・何か断る理由はないのですか！」

「断れない理由なら列挙してやるう」

「・・・たとえば」

「お前の兄は王の近衛筆頭だぞ」

「だからどうだと？」

「王と近衛達には既にお前が健康体であるとすっかりばれている。それで持って王はお前を招待しているのだぞ。これで断れば責められるのはルイザスだ」

「・・・」

「さらに言えばだな、彼の方はお前を呼んだと言いつらしているよ  
うでな」

「はあ?!」

「皆が一樣にお前は病弱であろう、というのだが、余りの可愛さに  
匿われていただけである、などと云っておるらしい」

「否定してください!」

「お前が健康体であることは事実だ。王の言葉に一介の家臣がどう  
逆らえというんだ」

「・・・それは、そうですが」

そこではつとずる。

「お父様!私にはエスコートしてくださる方がいらっしやいません、  
ですから!」

「まあルイザスには頼めまいな」

「そうでしょう!」

「しかしそう言えば彼の方がエスコートするといってくるかもしれ  
んぞ?」

「・・・!!ま、まさか、主催者がエスコートなど・・・しか  
も王ですよ?それは勘違いされるのでは」

「そうだな、寵愛されていると思われるだろう。彼の方はおそらく  
するぞ、言えばだが」

「・・・」

「都合いいことにだな、お前の噂を聞いて既に名のある方から申し

出があるのだ」

「一応聞きましよう、どちらの殿方です？」

「現宰相の息子、ハバーニール殿だ」

あら、眩暈が。

令嬢、父と会う（後書き）

ありがとうございました！

拙い文章を読んでくださる皆様に感謝を。

令嬢、客人と会う（前書き）

読んでくださっているかた本当にありがとうございます！

なかなか話が進まずに申し訳ないですが、気長にお付き合いくださるとうれしいです。

以前のあの方の登場です。

## 令嬢、客人と会う

ハバーニール・オレット。

現宰相の息子。当初騎士団を希望するほどの剣の腕の持ち主。闘技場での大会にて現將軍、バーデルード・カルカンに敗れる。

闘技場で目にした紅を思い出して、ルディは嘆息した。確かに女性に騒がれるような顔であるが、あの鋭いヘビのような目をはじめとして、醸し出す雰囲気も苦手だと思った相手だった。

闘技場で浴びせられる女性たちの黄色い声に、笑みを湛えて手を振り返っていたのを思い出して、ルディはその眉間にしわを寄せた。溜息を吐いてそれを指で解しながら、目の前の父に向って諦めとも言える問いをする。

「で、お父様、それをお受けになられるのですか」

「他に当てがないのでな」

予想通りの返事は、更にルデイの気を重くした。  
とてもではないが、できる気がしない。エスコートしてもらうな  
ど想像できない。

「大体最初からわたくしの意見など無駄ではないですか！舞踏会に  
行くところからしてっ」  
「仕方あるまい、相手は王だぞ。頑張つて目にとまらずに帰つて来  
い」

父親のいうこととは思えないが、ぜひそうしたいとルデイは思っ  
た。切に、切に。

無理だろうな、というのはルデイ以外の二人の心中に共通してい  
たが。

トゥーランドがくい、と眼鏡を押し上げ、その奥から主人を見つ  
めた。その視線に気づいたジムナスもトゥーランドに視線を合わせ  
る。

（お嬢様、どうして自分が舞踏会に呼ばれたか、お分かりになられ

てないようですね)

(そうだな、私もこんなことになるとは思っていなかったが)

(実際、お断りできないのですか?)

(無理だな、向こうの勢いは目を見張るものがある)

(容姿だけならまだしも、お嬢様のどこが良かったんでしょうね)

(そんなこと私には分らん。まあこの子を泣かせば親族が総出でてくるだろうな、ルイザス筆頭で)

(そうですね、分ってらっしゃるんでしょうか)

(さあな・・・)

二人が目線だけで会話を繰り返り広げる中、何とか打開策はないかと一人悶々としていたルデイの怒りのメーターは突如振り切れた。

「どうしてこうもうまくいかないの・・・私は、私はっ!!」

「落ちついてくださいませ、お嬢様」

「これが落ち着いていられる?! そんなわけないでしょ!! 何この八方塞がりはっ!」

「あのお・・・」

思わずぎろりと睨みつけてしまったのは仕方ない、条件反射だ。ルデイの余りの剣幕故か、こっそりと扉から顔を覗かせていたメ

イドがびくりと体を震わせ、じわっとその目に涙をためた。普段は優しい次女の怒りにふれて、相当びびっているらしい。

女性を睨みつけてしまったと理解したルデイは、さっと顔を青くするとドレスを翻して素早くメイドの元へ向かう。

目を見開いて言葉ともつかない微弱な声を洩らすメイドは、完全におびえきっているらしく、逃げることもできずただ立ち尽くしている。

なるだけ慎重に、そのメイドの手を取った。ドレスに気を使いなからふわりとしゃがむ。

「……ごめん、驚いたね。驚かすつもりはなかったんだ、許してくれる?」

素早く男装モードに切り替え。

少し憂いを帯びた碧の瞳が、不安げに揺れ、下から顔色を窺うように見上げてくる。申し訳なさを滲ませたその瞳は、先程の怒りを露ほどにも感じさせない。

そして仕上げは男も真つ青の落とし文句。

顔を真つ赤に染めたメイドは、はい……と小さな声を漏らした。すっかり自分の世界を作り上げ、ルデイが新たな信仰者を作り上げた瞬間だったが、本人はその自覚がない。それを分かっているジムナスは溜息をついて、二人を現実世界に呼び戻すために口を開いた。

「ルデイ、メイドを誑かすな。で、どうしたんだ？」  
「ふ、あ……、はっはい！実はお客様がお見えでして」  
「客？」

訝しげにジムナスは片眉をあげた。この反応からしても、約束などしていないのは明白だ。トゥーランドも思わず手帳を出して、予定を確認している。しかし結果は同じようだった。  
二人のなんとなく険悪な雰囲気には押されて、メイドは口ごもったが、ルデイの続きを促す視線を受けて頬を染めつつも続けた。

「あの、ハツケンベルド家の方だと」  
「ハツケンベルド？没落貴族じゃないか」

その名前で誰に用事があるのかはつきりとわかったルデイは、ドレスの裾をつまむと、足早に執務室を出て行く。  
それはあつという間の出来事だった。小声でメイドにお礼を言っ

たらしく、メイドは彫刻の如く固まっている。

取り残された父と執事は、一瞬その動きを止めたが、お互いに顔を見合わせる溜息をこぼしてその後ろ姿を追うべく執務室から踏み出した。

「テルミア！」

ドルトナンド家の扉の前に立っている少女に、ルディは階段の上から声をかける。メイド頭と何か話していたらしい少女が視線をあげ、喜びと驚きでその瞳を染めていくのを見ながら階段を下りる。

思わずといった具合でテルミアがこちらに寄って来るのを見て、思わず顔を綻ばす。ドレスの為に駆け下りられないのが齒がゆい。

今日のテルミアは以前の薄汚れたワンピースとは違う、若草色のドレスだった。そのドレスを用意したのは恐らく横にいる女性だろう。その麗しい顔に笑みを浮かべているのがここから見えた。

焦る気持ちを抑えながら、やっと二人の元にたどり着いたルデイが口を開く。

「ファナ、貴女がここまで彼女を？」

「あら、他にこのようなことができる人物がいて？」

妖艶な笑みに、隠す気もない自信を含ませてファルナールは笑んだ。

彼女の黒髪に赤い瞳とはぴったりのまるで燃えるかのような赤いドレスは、今日の為に新調したのだろうか。一体彼女にどれだけのお金があるのか甚だ疑問だ。彼女は貴族ではないというのに。彼女の裏の仕事である情報屋とはそれほど儲かるものなのだろうか。

「ルデイ、何を考えているか丸わかりよ。あなた。・・・あの仕事、なかなか上からも来るからね、いい時はいいのよ」

貢がせるのもありよ、などとのたまう彼女は本当に大物である。

その癖後腐れが殆どないこともルディは知っている。そこは彼女の手腕、といったところか。

以前勝手に貢いでくる、といっていたのも思い出して、女性としての彼女の魅力の凄さに心の中で感心した。

実質ルディも女性なり男性なりになかなか貢がれているのだが、本人に自覚はない。

「え、ファルナール様、ルディさまがお考えになったことなぜわかりで?!」

「あんたね・・・、もういいわ」

きらきらと目を輝かせて見つめる少女の視線を振り払うように、ファナは手を振る。その顔に呆れが滲んでいるのをみて、ルディも苦笑した。来る間もこんな会話をしていたのが容易に想像できる。

しかしそれにファナは呆れていても、嫌悪を持っているわけではなさそうだ。何か、この彼女の母性本能でも刺激するものをテルミアは持っているのかもしれない。

「それにしても、今日はどうしたの？随分急に」

「ルディさま、ここでは何ですから奥にお通ししてはいかがです？」

場を見かねたメイド頭の言葉にはつとした。話があるというなら友人である彼らを通すのは当たり前だ。

「ええ、そうね」

「い、いいいえっ！今日は以前のお礼と・・・その、その、あの、大変不躰ながらお願いがございまして、でででですですからそのようなことまでしていただかなくともっ」

どもりすぎだろう、と突っ込みながらもルディは首を傾げた。お願いとはなんだろうか。また闘技場に出て一戦と言われたなら、今度は流石に断ろうと思う。

とりあえず必死で手を振って遠慮をするテルミアに、どうしようもない、と言わんばかりに肩を竦めて見せるファナを一瞥して、やはりこの家の当主の娘である自分のすべきことは彼女たちを部屋に通すことだ、という意識に至ったルディが口を開こうとした時だった。

「テルミア、落ち着きなさい。通してもらおうではないか」

聞き覚えのあるようなないような声が出たと思ったら、扉を開けてにっこりとほほ笑む男性の姿が。

その姿に一瞬眉根を寄せたルディだが、嫌に考えが読めないその表情と、記憶の中の顔が一致したところで絶句した。

なぜ、ここに。

「ああ、ルディ、この方はテルミアの兄上よ」

なんでもないかのように紹介するファナにぎよっと目を見開く。ファナは知っているはずだ。

「こ、この人！闘技場に出てた人じゃない！」

「お会いするのは二度目ですね、ティグエストと申します」

にっこり、と笑ったティグエストはふわふわとした栗毛を揺らして、こてん、と首を傾けて見せた。まるで犬のような仕草にルディは眩暈がした。

犬にしては大きすぎるわよ！

「以前はすみませんでした」

「・・・ことの次第を聞かせてもらえる？」

「勿論です、ただ・・・」

ぐづぐづううう。

「・・・」

「私どもの腹の不法法をお許してください」

お腹が鳴ったことに顔を真っ赤にするテルミアといっそ清々しい笑顔で何事もないように言い放ったティグエスト。二人の同時に鳴り響いた腹の虫に、メイド頭が呆れたような顔をしながらも踵を返すのを視界の端に確認した。

これは早く通してあげなくてはね・・・。

「ファナ、二人にはなにも与えていないの？」

与える、という表現は間違っていないはずだ。ルディにはこの二人は犬にしかもう見えない。

耳をつけたら丁度いい。悪い意味ではなく。

と、本心から思っていた。

ルデイは眩暈を覚えて頭を押さえた。空腹でか再び壮絶な音を発するおなかの主たちを見て、次いで美貌の女性を見る。

彼女は、にっこりと笑って。

「悪いけど、帰ってこない食事は与えないの」

・・・そっ。

令嬢、客人と会う（後書き）

ルデイのエスコートの相手はだれになるのでしょうか。

まだ作者も悩み中です。

今回はハツケンベルド兄妹のお話。

感想の方で意見をいただきましたので、文章の方字下げをさせてい  
ただきました。

ありがとうございました！

令嬢、勘違いされる(前書き)

あ、あのですね、こんなにたくさんの方に読んでいただいて、  
こんなにたくさんの方にお気に入りしていただいて、大変嬉しいで  
す！

ありがとうございます！

皆様の求めるお話になるかはわかりませんが、これからもこの作品  
を読んでくださる方に感謝を。

## 令嬢、勘違いされる

「お嬢様！なぜこの者がここにいるのです！」

テルミア達を客間に通した後、目の前に並べられた食事に最初はそこまでしてもらおうのは申し訳ない、と首を振っていたテルミア。

兄のティグエストは本当なら遠慮する気など皆無のようだが、それでも食事を拒む妹をちらちらとみて、食事に手をつけるべきか悩んでいるようだった。しかしそれもテルミアが折れるまでの話。

彼女自身もさすがに空腹に耐えられなくなったのか。一言謝って食事の姿勢へと入った。その時は何の謝罪か分からなかったが。

二人がナイフとフォークをその手に持ち、一口手をつけた瞬間、あつげにとられるような食事絵図が始まった。

一言で言うならば、兄妹の腹は底なしと思えるレベルだった。

何がそこまで入るのか、という勢いで軽食を食べつくし、二人がまだなる腹を押さえたので気を利かせたメイド頭により、更なる食事が追加された。それこそ晩餐会の量だ。

山盛りにされた果物は一瞬でその姿を消し、小さめのさまざまな味のパンは「今何のパンを食べたかわかる？」と聞きたくなるよう

なスピードで、口の中へと消えていく。

二人は大食い選手権かと言わんばかりの勢いで、食事を腹に収めていく。そこで初めてファナが食事を与えなかった理由が分かった気がした。

。 . . . これだけ食べられたらファナもさすがにきついわよね . . .

そうして怒涛のような食事が終了した頃合いを見計らってか、執事であるトウランドが客間へと顔を出した第一声が冒頭のあれである。

「この者？」

「この女です！」

と、彼が珍しく家の者以外に対して焦ったように声を荒げ、びりりと指で指したのは。

優雅にお茶を口元に運ぶ漆黒の髪と紅の瞳の美女だ。彼女は執事に一瞥もくれずにいる。トゥーランドの行動はまるで知り合いのようだが、彼女にとってはそうではないのか。

怪訝に思ったルディは未だすました顔の美女に声をかけた。

「ファナ？知り合いだったの」

「ええ、お客さんよ。うちの」

なんだ、知り合いなんじゃないの。っていつか、お客さんだったのね。いつの間に。

「きゃっ、客などではありません！お、お嬢様がこのような者と会っていると聞いたから私はっ」

「ごめんなさいね。今日はあれ、持ってきてないの」

「変な言い方をしないでください！！」

意味深な笑みを浮かべるファナにトウーランドは真っ赤な顔をしてわなわなと拳を震わせた。怒りか、恥か、はたまた両方か。それは本人にしかわからないが、彼が恥でその顔を染めているというのなら本当に珍しい。

完璧主義を掲げるが故に、恥をかくような行動は慎むべき、というのが彼の持論だからだ。その彼が恥をかくような事態とは何事だろうか。

ファナの情報が元ならば本当に恐ろしい。ルデイは彼女に掴まれてはならない情報がないかどうか、一度自身の検証をすることを心の中で決めた。

「あれってなに？」

無邪気に問いかけたのはテルミアだ。唐突に始まった二人の言い争いに口を挟めなかったルデイと違って、ナチュラルに介入している。その顔には無邪気さだけが貼り付けられている。これだから天然は恐ろしい。

ルデイがちらりと視線をやると、もう一人の客人である兄の方はまだ食後のお茶を楽しんでいた。あげくメイドに茶菓子の追加を要求している。まだ食べるか。・・・兄妹そろって大物である。

「ええ？あれはあれよ。ごめんなさいねえ、言ったらこのひとが怒っちゃうから・・・」

「っっ！だから変な言い方しないでください！」

「じゃあ言っつていいの？」

「そ、それは」

くすり、と口元に手をやって笑う彼女の妖艶さは女の自分でも赤面してしまいそうだ。

彼女にいいように振り回され、うろたえたトウーランドの顔は今度は青い。こんなに楽しそうなファナは初めて見たが、兄のルイザスが家宝の花瓶を壊したときよりも、トウーランドは青い顔をしている。ルディは若干憐れみを覚えた。

しかしその二人の会話に割り入ることもできず、ルディは仕方なくティグエストに倣って紅茶を啜った。

あのトウーランドをここまで苦しめるとは。彼女が掴んでいる彼の弱みとやら、今度買ってみようか。幾らくらいだろうか、などとルディは考えだす始末。

そんな彼女の思考を知らない、二人の言い争いはヒートアップしている。

この部屋での最高実力者にあたる彼女が、介入を諦めた時点で、二人の攻防、というか主にファナのトウーランドいじめがこのまま続くかと思えた。

「あの・・・」

発言しようとおずおず、と言った具合に手を挙げたテルミアに、周りの視線が一気に集中する。すごいな、火に油を注いでおいて自分で鎮火作業までしてくれた。

彼女の兄ですら、その手に持ったフォークをケーキに突き刺したままで固まっている。いつの間にケーキまで出してもらったのか。

「どうしたの？」

「あの・・・不躰なことを聞くようかもしれません・・・」

「何？」

何かこちらに不手際でもあったのか、はてさてこの曰くありまくりの屋敷に何かあったのか。それともこの個性豊かな者たちのことかしら？

ルディは首を傾げたが、それを表には見せず、完璧な笑みを持ってテルミアの話の先を促した。彼女はやはり逡巡するかのような仕事をしている。

が、意を決したように顔をあげて口を開いた。

「・・・なぜ、女装なさっているんです?」

「は?」

「いえ、ですから、今日こちらに来た時から思っていたのですが、なぜルディさまは女装を・・・?」

「」「」「」

沈黙は部屋全体に広がった。え?え?と戸惑ったようにテルミアが部屋を見回す。しかしその視線に肯定で応えたものはなかった。

「ファナ・・・」

「何？」

「言っていないの？」

「……忘れていたのよ。あなたも同じでしょう？」

……正直彼女よりインパクト大の人物に正体知られた後なのでね。しかも最悪の形でね。

玄関前で見せた彼女の驚きとは、これが理由だったのか。てつきり自身の伯爵令嬢らしいドレスや、屋敷に驚いているのかと、さして気にしなかったのだが。

この屋敷で驚いた顔をする人間には慣れていたので、そこまで意識が至らなかった。まさか、自身が彼女に正体をばらしていないとは。

「……」

一日のうちで何度目だろうかと数えるのも億劫なほど、こんなにも頭痛を覚えたのは久しぶり、というか初めてだ。

まだ戸惑うような表情をするテルミアを一瞥すると、ルディは小さく首を振って、面倒、という言葉で頭から追い出す。そしてソファから立ち上がった。

行き成りのルディの行動に誰も付いていけず、トウーランド以外が全員着席したままだ。

ドレスの裾を軽くつまみ、ルディは至極丁寧な礼とともに微笑を零した。

「では、改めまして。ドルトナンド家次女、ルナディア・ドルトナンドと申すものです。テルミア様、ティグエスト殿におきましては闘技場の件では、お世話に……いえ、お世話しました」

にっこり、と若干腹黒な笑みを浮かべた彼女に、テルミアは絶句。

トウーランドとファナですら苦笑いを浮かべた。

「そ、それは失礼しましたっ、あの、本当に格好よくてですね・・・  
男性だとばかり」

顔を真っ赤にしてテルミアがたどたどしく口を開く。

彼女もまた、自分にある種の王子像を抱いていたのかもしれない。  
若干落胆して見える。男装している自分は、自分で言うのもなんだ  
が女性にもてる。自分を男性と信じていたならこの落胆も領ける。

決してさっきのように勘違いはしないわよ。

剣を交えたティグエストも自分が女だとは思いつかなかったのか、  
口の中にケーキが入ったまま目を見開いている。とりあえず、飲み  
込もうか。

その視線での訴えが通じたのか、彼はごくと喉を鳴らしてケ  
ーキを飲み込むと、しばし食い入るように自分を見つめてきた。

暫くそうしていたが、何かに納得したように頷くと「女装ではな  
かったのですね・・・」と呟いた。

そうですね、何か？

彼は未だ突き刺したままだったフォークをケーキから抜いて、皿  
の端に置いた。そしてテルミアに視線を向けた。その視線は真剣そ  
のものだ。

「テルミア、とりあえずあれをお見せしましょう」

「あ、あ、そうね、兄様」

そう言って彼女は、持っていたポーチの中から丁寧に折りたたまれた布を取り出した。その布は刺繍が凝っているわけでもなかったが、きちんと洗われて綺麗だった。

それを大事そうに膝に置くと、ゆっくりと開く。そしてその中から出てきたものを手に持ち、ゆっくりとルディに差し出した。

「・・・これが、母のブローチです」

嬉しそうに微笑む彼女の手に乗っているのは、大きな翡翠の嵌めこまれたブローチだ。翡翠の周りにはささやかな金の装飾で縁どられ、翡翠自体は長い年月を超えてきたのだろう、アンティークな香りが漂う。

それでも、大切にされてきたのだろうというのが一目で分かる品だった。

それを見つめる兄妹の視線は柔らかい。

「そう・・・よかったわね」

あの試合の後、全て渡すと言われたが金品の殆どはフアナに情報料として渡し、目的だったブローチは直接テルミアに渡すように闘技場に申請しておいた。

無事に届いたようで良かった。

「兄妹揃って、お礼申し上げます。ありがとうございました」

ペこり、と頭を下げる兄妹にルディは笑みを向けた。しかし、困ったように眉根を下げる。

「・・・けれど、詳細を聞いていないわ」

なぜ、彼が闘技場にいたのか。  
どうしてここにいるのか。

「それも今から説明いたします。ただ、その後ひとつお願いがございます。頭の端に留めておいていただきたい」

「・・・何かは分かっているけれど。いいわ、話して頂戴」

にっこりと笑うと、ティグエストは姿勢を正して、その口を開いた。



令嬢、勘違いされる(後書き)

読んでくださってありがとうございます！  
まだ大物兄妹とのお話が続きます。

誤字脱字がありましたら、こっそり教えてください。  
隙を見て修正はしているのですが・・・

令嬢、事のあらましを聞く(前書き)

更新が滞ってしまい、すみません。

地道に頑張りますので・・・今回は少し長めです。説明が主ですが、気長にどうぞ。

令嬢、事のあらましを聞く

彼は何度もルディに礼を述べた。

テルミアを助けたこと、ブローチのこと諸々に関して、最大級の感謝を持って。隣でテルミアも目を潤ませながら、何度も謝辞を口にする。ぎゅっと手にブローチを握りしめて。

そんなテルミアを見て、ティグエストはその柔らかな顔を綻ばせていた。こうしてみると、栗毛であることも相まって、笑い方もテルミアによく似ていた。目元を細める笑い方がそっくりなのだ。

妙に納得しているルディに、兄弟は首を傾げていたが、なんでもないと頭かぶりを振った。

彼が事のあらましを語り始めたのは、それからである。

「実は、テルミアが家を出た後、私も追って家を出ました。けれど王都でこの子を見つけることができなくて……」

その時に見つけたのが、テルミア同様闘技場の大会のチラシの景品欄に乗せられた、形見のブローチだったらしい。

妹を連れ戻すために田舎から出てきたといっても、彼も父のあの憔悴した姿を見た身。

「なんとか、したい。」

彼を突き動かしたのはその想いだ。

テルミアと同じように彼は居てもたってもいられなくなった。しかし、お金もない。この王都での知り合いもない。

ならば実力行使しかないと、直ぐに大会参加申請を出したのだった。

―さすが兄妹。思考回路が一緒である。

参加費を捻りだすのと、その準備とで王都に来るまでの用心棒としての稼ぎをすっかり失ってしまっただけという。

とりあえず大会に出れば、ブローチも取り戻せ、賞金ももらえ、あわよくば妹を見つげる事も出来るだろうと彼は大して悩まなかったらしいが。

・・・大事なことなのでもう一度。さすが兄妹思考回路が一緒である。

そして、参加当日。

彼はある美女に声をかけられる。その時点で彼は防具を身に纏い、いざ出陣という時だった。

道急ぐ彼を呼びとめたのは、女。その女は彼が今まで会った中で、最も艶めかしく、そして不思議なオーラを放っていた。神秘的、と

もいえるものを。

明らかに参加者でもなく、かつ開催者でもないだろう。彼は怪訝な顔をしながら、一步引いた。それを見た彼女は声もなく笑った。そしてあるうことか、その美女は彼の名を呼んだのである。

『貴方は、ティグエスト？』

『そうですね、貴女は・・・？』

『わたくし、テルミアを保護させていただいていますの』

『?!・・・っ、どういうことなのかな？』

『警戒するのも最も』

彼女は薄笑いを浮かべた。言葉を否定することもせず、ティグエストの問いに答えようとしてもしない。ただ、こちらの出方を見ているのだ、彼女の最初のカードを切って。

しかしそれを理解してもティグエストに足掻く術はない。

こちらのカードなどたかが知れている。自分出来るのは、相手の要求を聞き入れる事だけだ！。

驚愕に目を見開くティグエストを横目に、その紅の塗られた艶めかしい唇が、弧を描く。

彼女の、小手調べは終わったのだらう。

ただ一言、馬鹿ではないのね、と。

彼女はやけにすつきりとした瞳で、視線を和らげた。くすりと笑うその先にみているのは、おそらくティグエストでは、ない。

『彼女を助けて、拳句ありあまる善意を総動員した馬鹿がいますね』

そして彼女は語る。

ある男（実際は令嬢）と、彼の妹の出会い、そしてその後の展開を。

「……そのバカつてまさか、私？」

「……そのところはノーコメントでお願いします。事のあらましを聞いた以上、私はあなたに、恩人であるあなたに剣を向けるなどできなかつた」

彼は困ったように眉尻を下げた。

その時点で、彼が自分を恩人とみなしたかは定かではない。が、もし彼が自分の立場だったならばとルディは思考を巡らした。

妹は相手にとられている。この時点で大会で勝ち進むべきではないだろう。

ならば自分は、相手が信じるに足る相手ではないなら、一旦引いて大会後に妹を取り返す算段を付ける。

そうでないなら、そのまま妹を引き渡してもらおう。

テルミアと違って、ティグエストの第一の目的は妹を取り戻すこと。

ならばあの時点での彼の選択は、どうであろうと正しかったのだろう。

結果ルディは優勝し、ブローチも取り戻すことができたわけであることは嬉しい誤算といったところか。

とりあえず、彼が剣を向けなかった理由はどうであろうと自分が納得できる形であるのだ。

良しとしよう。

それよりも気になるのは。

「試合中の笑顔は・・・？」

やたらと笑い掛けられていたのは今でも印象に残っている。

先程のような柔らかい笑顔、ではなく、花がとんでいるかのような笑顔だった。

あの時はそんな顔をされる理由がさっぱり皆目見当もつかず、かなり困惑させられたのだ。

彼は、あ、と呟くと、居心地悪そうに視線を彷徨させた。

「それは、まあ、妹を助けてくれたのがこんな美形だと知れば、ちよつとうちの妹にも嫁ぎ先が・・・」

「もういいです」

「・・・すみません」

ほり、と頭を掻いた彼に、なんとも言えない視線をルディは向け

た。男装している身としては褒め言葉としては嬉しいものだが、正体を知られた今、なぜか喜びは薄かった。

テルミアを既に妹のように思っているからだろうか。大体自分を困惑させたあの笑みの理由がそれだからか。

深く溜息を吐く。これで不満が解消される訳ではないが、気分的に少し楽になった。

しかし、はたとティグエストが優勝すれば何の問題もなかったのでは、ということに思い至る。ティグエストの実力がいかがかは置いておいてだ。

自分が出る必要もないなら、あの苦勞も、果ては王に目を付けられることもなかったのだ。

足を組んで座っている美女に、若干の苛立ちをこめて声をかけた。彼女は、全て知っていたはずだ。彼女だけが。

「ファナ、どうして大会が始まる前に教えてくれなかったの！」

ティグエストがでるということを教えておいてくれれば、出なくてもすんだものを！

「しょうがないでしょう。私も神じゃないわ。ティグエスト殿が王都に出てきていると知ったのは、本当に直前だった」

不遜な態度で言い放つ彼女。その視線には勿論悪びれもない。悪びれる必要もない、とありありと語るその瞳に、ぐつと言葉に詰まったのはルデイの方であった。

確かに彼女はテルミアの情報を知らなかった。ならばあのタイミングで彼女の身边情報を集め始めていたとしても、大会前がぎりぎりであったというのも嘘ではないかも知れない。

いや、あのスピードで没落貴族の家族内情報を手に入れたのだ。  
・  
・異常である。

「それでもなんとかティグエスト殿に会って、あなたのことを話したらああなっただけよ」

しれっと言い放つと、ファナは再び紅茶を啜る。自分の客人に遠慮の二文字はないらしい。

「……先程からつ、貴女はルデイ様に対する言葉遣いがっ!!」

存在が薄れかかっていたトゥーランドが怒気も露わに声を張り上げた。そのままファナに突っかからんばかりの視線を向ける。猪の如く突撃していきそうだ。

そんなにも彼女が嫌いなのかと、若干呆れの眼差しを向ける。

「いいの、トゥーランド。彼女とは伯爵令嬢として付き合っていたわけではないもの」

「しかしっ、ここは伯爵家です！それ相応の振る舞いというものがっ」

「私がいいと言ったの。まだ何か言うつもり？」

ルデイは表面上冷静だが、瞳の中に苛烈さを滲ませてトゥーランドを見据えた。ぐっと言葉に詰まったトゥーランドが、頭こぶを垂れて口を噤んだ。

(こつこついう所が、お母様譲りでいらっしやる)

このように人を従わせる力を持つものは、そうはいない。叫ぶでも、諭すでもなく、ただその視線だけで思わず膝を折ってしまうような、そんな強さが彼女にはあるのだ。

そして、この国のトップにも。

「結局どうあれ。私が面倒事に巻き込まれたのは自業自得なところがあるから、諦めることにするわ・・・」

盛大な溜息とともに、ルディは言葉を吐き出した。

過去は取り戻せない。全てが今さらなのだ。舞踏会に行くことも、王に正体がばれたのも取り消せない事実。いつまでもぐだぐだと言っ  
ていられない。

切欠がテルミアの頼みだったとして、その後の展開は全て自分が招いたことなのだから。けれど。

(なんとしても、逃げる算段を考えなくちゃ・・・！)

ぎりっと歯を食いしばり、眉を顰めたルディの心情を理解できた

ものはいなかったのか、全員が不思議そうな顔をした。

彼女はこれまでの事態を諦めたのは諦めたのだが、まだ王から逃げることが諦めていないのだ。しかしぶつぶつと呟きながらそれについて考えていたため、全員が「壊れた！」と判断し、一歩引いてしまったのは彼女の知るところではない。

それに冷静に対処したのは、勿論彼である。

「お嬢様、戻ってきてくださいませ。まだ彼の話は終わっておりません」

「はっ！」

「あ、すみません、何か・・・」

先程の荒々しさを露ほどにも見せない執事。たった今現実に戻ってきた令嬢。申し訳なさに、若干冷汗をかく没落貴族の息子。兄の残したケーキを虎視眈々と狙う没落貴族の息女。

「・・・カオスだわ」

まとまりなど皆無ではないか。なんだろうか、この集まりは。ファルナールの呟きは誰にも取られることなく消えていった。

「さ、話の続きを」

「実は、先程も申しましたが……我が妹共々、実はお金がなくてですね」

「……は？」

「あの、本当に申し訳ないのですが……！！私たち兄弟を雇っていただけませんか？！私も端くれではありますが傭兵の役もしておりました、妹も下働き程度ならこなせると思います、どうか！」

「おっお願いしますっ！！」

突然ソファから滑り落ちるように、がばつと頭を下げた兄妹に、  
啞然。

唯一全ての話を理解しているファルナルだけが、紅茶のおかわりを催促していた。

しばしの無言。

言葉を咀嚼するかのようなその間に、最初に口を開いたのは、執事だった。彼は思いつきり顔を顰めていた。

「分かっているのですか？自分たちがどれだけ厚顔な真似をしているか」

「・・・承知の上です」

「そちらから自分を売り込もうとしているのですよ？お嬢様に助けられた身でありながら、まだ求めるとは・・・無礼も甚だしい。伯爵家を侮辱するおつもりか」

「・・・っ、無礼は申し訳ありません、ですが、我等兄妹、このご恩をなんとしても返したいのです・・・！」

「・・・お金を請求する時点で、恩を返せていないと思えますが・・・」

「・・・」

「「・・・はっ！！」「」

今気づいたのか。

「・・・お金が必要ということは分かっているわ・・・そうねえ」

考え込むようなルディの言葉に、希望の光が差し込んだ！と言わんばかりに顔を輝かせる兄妹。

「お嬢様、貴女様は・・・そういう所が甘くていらっしやる」  
「中途半端に助けて投げだすのは、ただの突きまわしただけよ。なら、なにもしない方がまだましだわ。手を出してしまったのも、ここまできたら、とことんやるわよ」

にやり、と笑う令嬢に反省の色はなく、執事はまた、顔を顰めた。彼の顔は早くから老化しそうだ。

「どちらにしても、お父様に薦めるにしても、トウーランドより弱ければ話にならないわ」  
「失礼ですが・・・執事さまは剣を嗜んでいらっしやるのですか」  
「やってみればわかるわ」  
「私がやるのですか・・・」

新たにため息をついたトウーランド。  
彼はもう心労だけでその身を削り取られているにも関わらず、今まさに身体的にも削られようとしている。

「さあ、庭に出ましょか」

至極楽しそうに笑う、元の調子を取り戻した令嬢を止める権力を  
持つ者は、この部屋には存在しなかった。

**令嬢、事のあらましを聞く(後書き)**

ありがとうございました！

次は執事、戦います。もちろんティグエストと。

戦闘描写苦手ですが、好きなのでやたら無理やり入れます。

ご了承ください。

そろそろ令嬢にはもとの勢いに戻ってほしいと思いつつ・・・  
やたら受け身状態ww

令嬢、戦わせる（前書き）

おかしいな、舞踏会編だというのに。なかなか進まないじゃなry  
とにもかくにも、久しぶりに王様が登場です。絡みはありません！  
タグの恋愛？の意味がよくわかりまry

## 令嬢、戦わせる

そのころ。  
王城にて。

「つつレーナルトオオオオオ！！！！」

「なんだ」

「だから不敬罪になるって言うてんだろぅがあああ！！！！」

ばぁん！と彼の王、レーナルト・シュナンベルムの執務室の扉が開け放たれた。

それをしたのは、近衛兵筆頭であり、彼の親しき友人である人物。そのまま突撃していこうとしたらしいその体には、近衛兵が二人しがみ付いている。なぜか侵入者を止めるべき近衛兵が、同じ近衛兵を止めようとその力をフル動員しているのだ。

無礼も甚だしい、まさかの王呼び捨てを行った近衛兵隊長。

その血走った眼には理性など残っておらず、その身にまとう空気はまるで魔界の瘴気のごとく。その形相には、幻覚かも怪しい角が

見えるような気がしてならない。

そんな人外の隊長を前にして、それでも臆さない同期の近衛兵。彼らは果敢にも、がしいっ！と今度は首を掴んだ。なんとしても引き留めようとする彼らの涙ぐましい努力。

しかし、掴まれた人物は、異常な握力を発揮してぐいぐいと首からその手を引き離していく。

その間も視線は彼の憎悪の対象に釘付けだ。その対象は広い執務机に幾束もの書類を積み重ね、その手に判を握っていた。

今度は口からも瘴気が！と言わんばかりの勢いで、まるで呪詛のように近衛兵隊長は言葉を吐き出す。

「……よくもよくもよくもよくもよくもよくもっ！！」

「ルイザス、言葉にしてくれないか、さすがに僕でもわからない」

「……ルデイをルデイをルデイを……！！！！」

「先程隊長はルナディア様が舞踏会に参加するという件を聞かれましてっ」

「ああ、そのことか」

分からなかった、とあっけらかんと言い放った王。妹の名前を繰り返す近衛兵隊長から溢れる瘴気を気にも留めず、視線もよこさず、書類にぼんと判を押した。

そして次の書類を横から出す。

「事実だ」

ぼん、とまた判。

「私の可愛いルディを！あの汚らしい女の満ち溢れた会に参加させようというのか?!」

そのまま抜刀しようとして腰に手をやるうとするので、三人目の近衛兵がそれを止めにかかった。

「……ルディはお前のじゃない」

じろり、とレーナルトがルイザスを睨んだ。

そこですか?!今貴方の近衛筆頭さまがおっしゃったことは問題発言が溢れていたように思いますか?!

動搖の余り、とある近衛兵の言葉は口からは出ていない。ただ口をぱくぱくと動かして、顔面蒼白になっているのみである。

「何をいうー！ルディは私の可愛い可愛い可愛いっ……私のっ！」

彼は、普段の無表情をどこに置いてきたのか。拳をぶるぶると震わせながら、未だくつついたままの近衛兵を引きずり、王へと近づいていく。

「彼女は私の妻になるんだっ！」

レーナルトも我慢ならないと言わんばかりに立ち上がった。その拍子に書類が巻き上がる。

王！確かに我等はあなたのプロポーズを知っていますが、それは他の人間には極秘事項ですからね？！

何せお相手に逃げられましたからね？！ものの見事に！

「その口切り裂いてくれるっ！」

「言っじゃないか、かかって来い！」

「いつ、いい加減にしてくださいいいいっ!!」

「隊長は兵の訓練に！王はどうかそのお仕事を投げ出さないでくださいませー!!」

「お願いですから！止まってください！！後生です!!」

近衛兵達の絶叫が響き渡った。

「武器は何にしますか？」

「あの、差し障りがないなら、棒でお願いします」

「棒？貴方、棒術をつかうの？」

「いえ、あの」

そのころ。

ドルトナンド伯爵家にて。

庭に出た彼らは、その庭に常備されているといっても過言ではない、豊富な武器を前にしていた。

無論、模擬戦用の武器である。

その扉の鍵を開けた執事が、確認するかのように振り返り、武器の要望を訊ねた。するとティグエストからは、先程の返答。

真面目な執事は大人しく、彼の身丈にふさわしい棒を探すために武器庫に踏み込んだ。

一方ルデイは、不思議そうに首を傾けながら、ティグエストに問いかけたが、彼は言葉を濁すばかりだ。

彼の言葉をついだのは、妹だった。彼女は例に見ないほど冷静な顔でこう言った。

「ルデイさま、うちにはお金がありませんでしたので、いろいろとあつた時には兄さまは、棒か鍬で対抗していましたの」

「・・・鍬？」

「はい、鍬です」

ティグエストは正直、ぱつとはしない。優しげなその顔は、農業が似合うといっても可笑しくない。決して優しげな顔イコール農業というわけでなく、彼の雰囲気やらなにやらを統合した意見であることは押さえておいてほしい。

汗を流しながら畑を耕し、その首にはタオル。さんさんと降り注ぐ太陽を受けて、彼はその暑さからタオルで顔を拭う。

きらきらと輝く野菜を嬉しそうに眺める彼。

・・・容易に想像できる。

そんな青年が、いきなり鍬を持って襲いかかって来るとしよう。

「・・・ホラーね」

その絵で彼は農業でかいた汗により輝いたままだから、まるで殺戮者のようだ。・・・農家をバツクにした絵はギャップが激しい。

脳内がおかしいことになってきた。やめよう。

頭を振って、その絵を頭から追い出すと、あながち間違っていないかったのか、テルミアが微妙な表情をしていた。

「さっきの私の考えについては忘れて頂戴。・・・彼は自己流なの？」

「自己流かはわかりませんが、父は棒術をしていたとききます。それを幼い時から教えてもらっていたようです」

「へえ」

妹ばかりから説明を受けて、当の本人がいないと思ったら、彼は

トウーランドについて武器庫へと入って行ったらしい。自分に合うかどうか見繕いに行ったのだろう。

しばらくして戻ってきたその手には、彼の身長と同じくらい、いやそれ以上の長さの棒が握られている。

彼は満足げにそれを眺めると、すたすたと武器庫から出てきてくると回した。そのまま左脚を引き、一回転させながら棒を引きよせた。腰に構えると次いで右足を引き、左脚を前に出すと同時の体重移動。

手首でぐっと回された棒は、かなりの速度をもつてして空気を切り裂き。

ぴたりと地面に平行にされて止められる。

「思ったより扱いやすいです。重さも丁度いい」

「うちにはダサイ武器は置いていないのよ」

「そうですね、ドルトナンド家の武器庫はさすがです」

ははっと笑う彼は、今から戦うということを知っているのか。

やたら楽しそうだ。彼の後からトウーランドも棒を持って出てきた。

「あれ？トウーランドさんも棒術なのですか？」

「いえ、専門は違いますが。使えないこともないので」

「さあ。始めて頂戴」

ぱんぱんと手を叩いたルディを一瞥した二人は、軽く会釈をした。

「御意」

二人の人間は庭の中心へと歩み出る。距離を取って、それぞれの武器を構える。

トウーランドはまるで剣を持つかのように片手で構え、ティグエストは棒の真ん中付近を掴んで、腰を落とした。

「はじめ」

ただ楽しそうな声が一言開始を告げた。

先に動いたのはティグエストだ。彼は腰を落とした姿勢のまま突進する。

慣れた動作で右手を逆手に捻り、腰を捻っての突き。ぎゅっと捻

りの力を加えられたその棒が、トウーランドの体を真正面から狙う。しかしトウーランドの反応も素早かった。

一歩後ろに後退すると同時に下段からその棒を振るった。

かん！という音とともに二つの棒が交差される。しかし受け止められることをよんでいたらしいティグエストはそのまま左手を動かし、突きから上段からの振り下ろしへと転換。先程と逆の先が、トウーランド目がけて空気を裂く。

トウーランドは一瞬その眉をぴくりと動かしたが、即座に手首を捻って八の字を描き、その攻撃を防いだ。

ティグエストの真横に回り込んだトウーランドが、間合いを詰め棒を振るう。

小さくテルミアから悲鳴が上がった。

「お兄様……っ！負けてはだめです！」

その声を聞き取ってか、苦し紛れにティグエストはそれを防ぎ、無理やり距離を取ろうと右足を下げたが、トウーランドは追撃を行う。

「くっ……っ」

ティグエストは距離をとることを諦め、真っ向からトウーランドに向かうべく足を踏み込んだ。

「私たちのご飯がかかっていますのよ！！血が出ても骨が折れてもいいから、頑張ってください！！！」

切実ね。

「そこですかああああ！！！」

分かるわ、突っ込みたいわよね。トウーランド。

「ボケが多いんですよ、この兄妹いつ！！面倒事はこの家の人間だけで十分ですっつ！！！」

ルデイの心を読んだのか。常日頃のストレスからの叫びを上げながら、トウーランドは乱打。

乱打乱打乱打。

幾らかがティグエストの体を掠め、彼が呻いた。

ぎらり、それこそこの表現が正しい。トウーランドの目が怪しげな光を放った。

それに負けじとティグエストもその瞳を猛らせ、声を張り上げた。

「負けるわけにはいかないんですー！ー！ー！！」

「ご飯のためによね。」

分かるわ。人間生きていくには食料が必要よね。

「ざけんなああああ！ー！こちとら、毎日体と精神病んでくんですよー！！この家で働くのに安っちい根性じゃ身を滅ぼすわー！っ！！」

何気に心配してるのね、優しいわね。

・・・でも聞き捨てならない言葉がたくさん入っていたわ。あとで呼び出しね。

かん！かかん！かんっ！がんっ！ごっ！

棒が激しくぶつかり合う音。一方的に攻めているのは（色んな意味で）トゥーランドだが、ティグエストも中々やる。

ぐっと歯を食いしばった彼は、縦横無尽に棒を振るい、トゥーランドを隙あらば仕留めようとその目を光らせる。

棒の先を弾き、逆手に持ちかえ、払う。振り下ろす。突く。

あらゆる手段を用いて、トゥーランドを狙い続ける。

・・・凄いわね。あの、トゥーランドを相手に。

彼ならば、もしや闘技場でも狙えたかも知れない。

実力は確かにルディより劣る。しかし、勝利を執拗に狙うその執着こそ、彼が勝つに値する理由となったはずだ。

「苦労なんて・・・そんなこと、覚悟の上です！」

「もういいでしよ」

ぱちん、と扇が閉じられた。

思わず、といった具合に動きが止まる、両者。

何事かと振り向いたルディのその視線の先にいたのは。

「お母様」

「楽しそうなことをしているじゃないの、ルナディア」

ステイールナ・ドルトナンド伯爵夫人。

横に侍従を従えた彼女こそ、ルデイの母である。その美貌は年を感じさせず、ルデイと同じ碧の瞳は愉快さを滲ませている。

嫁いできた身である彼女は銀髪ではなく、燈色の髪だ。つやつやとしたそれが高く結びあげられている。

ルデイと同じように快活な彼女は、ごてごてしたドレスを嫌う。だからこそ美しさだけを求めたシンプルなドレスを身にまといつていく。きらきらと輝く小さな宝石は、彼女をより美しく魅せていた。

「その子たち、何かしら。気に入ったわ。私が暫く預かるわ。雇う話なら、私からジムナスに通しておきます」

何が入ったのかが一番気になるわ。お母様の考えていることが分からない。

けれど、この家でお母様に逆らうのは、例えお父様でも不可能！お父様の命のために、そして私の命のために。ここは言われるがままが一番。

保身を選択したルデイは了解の意を表すように、目を伏せた。

「奥方様は暗器の達人ですが……。お任せして大丈夫なのですか」

ぼそり、と耳打ちしたのはトゥーランドだ。甲斐性がある彼は、

あの兄妹を切実に心配していた。関わってしまった人間を放っておけないのは彼も同じである。

一度テリトリーに入れてしまえば、彼にとって彼らはもう他人ではなくなるのだ。

「あの子たちが『影』になって帰ってきたらどうしようかしら・・・」

「冗談になりません。どうするんですか、本当にそうだったら」

「それこそ侍女とか傭兵じゃなくて・・・本格的につかうことになりそうだわ・・・」

ルディを守る、『影』として。

所謂一暗殺兵である。

哀れなのかそうでないのか判断に困る兄妹二人は、ステイルナにぺこぺこ頭を下げている。それを見て溜息をついた主従二人。

そこで思い出したかのように、ステイルナがちよいちよいとルディを手招きした。

近づいたルディに内緒話をするかのように、ステイルナは声を潜めた。

「そうそう、ルナディア。舞踏会のことだけれど。貴女、一応デビユタントでしょう？なら、お父様に任せましたからね」

はい？

「大分行き過ぎたから、どうかと思ったけれど。いいじゃない、可愛らしくお父様に連れられて行きなさい」

扇で口元を隠しているといえど、その目は弧を描いている。  
・・・楽しんでいる。今さらの娘のデビュタントを。一興だと。  
ひびい。

「・・・でも」

急に声音が変わった。ルディは、訝しげに母の顔を見上げた。その瞳には、至極真面目な光が宿っていた。

「宰相には、気をつけなさい。あなたの闘技場での云々・・・ばれている可能性がある。下手なことに巻き込まれるんじゃないありませんか。んよ、うちの家でも守りきれないかも知れませんか」



## 令嬢、戦わせる（後書き）

まさかのお母様登場でした。結局お父様とともに行く模様。そして、そろそろ役者も揃ってまいりました。

最近思うのです。もっとさくつと話を進めるべきなのではないかと  
・  
・  
テンポどこに置いてきたのだろうか・・・

令嬢、舞踏会へ行く(前書き)

やっとここぞとつこいさで舞踏会です。  
ルナディア、前回の余裕はどこへ。

## 令嬢、舞踏会へ行く

華やかに飾られた大広間には、着飾った貴族で満ち溢れていた。

きらきらと輝く巨大なシャンデリアが釣り下がり、壁には目を凝らさねば気づかない程に細微な装飾が施されている。並べられた食事は国の物だけに留まらず、多種多様。

まさに豪華絢爛というに相応しい。

本日の主催者である王がまだその壇上に現れていない今、それぞれが思い思いの場所で談笑していた。

呼び寄せた音楽家たちがそれぞれの楽器を用いてさまざまな音を奏でる。その音楽に合わせて体を添わす者もいる。扇で本性を隠し、丁寧な言葉の中に辛辣な言葉を混ぜる者。蓄えた鬚を撫で付けながら自慢話に花を咲かせる者。

一見穏やかに見える会話の中で腹の探り合いが行われている、この社交界<sup>せかい</sup>。

その一角に、とてつもなく目立つ集団がいた。  
煌びやかなドレスが、光を反射して輝いている。大きく開いた胸元。これ見よがしな宝石。高く結いあげられた髪。香水による香りも、化粧も濃い。彼女たちが笑う度にさざ波の如くそれは広間へと広がっていく。

王妃候補と名高い、マルティギー二侯爵家の娘、エルルマリア。目立つその集団の正体こそ、彼女を含めた彼女の取り巻き達である。

子爵の娘、ダヴァンスイナ。

伯爵家の娘、アパパネ。

この三人が筆頭である。周りにはその彼女達を囲むように、女たちが集まる。そしてそれに近づこうともして、遠巻きに彼女らを眺める子息たち。

誰しもが憧れる美貌、そして地位。

エルルマリアは、そんな自分に誇りを持っていた。自慢の金髪。父譲りの少しくすんだ紅の瞳は正直好きではないが、手入れを欠かしたことがない象牙色の肌は自信がある。スタイルだってそこら辺の女は目じゃない。

それにほら、自分に集まる人々！これこそが自分の魅力の象徴ではないか。エルルマリアは高笑いしたい気分だった。

「そういえば、噂の令嬢。なんでもハバーニールさまのお誘いを断つたんだそうよ」

「まあ！ハバーニールさまの！」

「なんて厚顔なの」

「一体どんな女なのでしょう」

「病気で籠っていたというけれど」

「噂じゃあ、ドルトナンド家でも稀に見るブサイクで、家に籠っていたとも言われてるわ」

「どんな醜悪な顔なのかしら、フフフ」

「早く見てみたいものよね、その醜悪な顔を！」

「こら、あなたたち。そういうものじゃないわよ。どんなに醜かったって、あのドルトナンドの家のものですもの」

「ルイザさまにかけらでも似ていたなら、少しは見れるものかもしれませんわねえ」

「オホホホホ」

そつだ、どんな醜悪な顔か見てやろうじやないの。

宰相の息子、ハバーニール。この国の美貌の国王、レーナルト。

この二人が気にとめたという、まだ見ぬ女にエルルマリアは嫉妬していた。渦巻く熱で、彼女の胸の内は焦げそうだった。

ぼつとでの女に、自分が負ける筈はないのに。

そう思っているのに、なぜかざわつく胸を押さえた。  
じつと眼を閉じる。

ーわたくしが一番よ！誰も、私以上に、目立つなんて許さない。

同じ年代で自分の美貌に勝てる者などいない。何を持って、自分より人を惹きつけるものはない。

目を開いたエルルマリアはそう信じて疑わなかった。

「ドルトナンド伯爵家さま御到着！」

高々とした声とともに、会場の扉が開かれる。

「……うそ」

思わず零れた眩きは、自分のものか。それとも自分を取り巻く、  
女たちの眩きか。

彼女の碧の瞳が、自分を見た気がした。

窮屈。

今の自分の状態を一言で表すならそれにつきる。きつく絞められたコルセットは、胃を押しつぶさんばかり。いつか圧迫死するのではなかるうか。鍛えられた自分の腹筋が抗おうとしているが、コルセットは驚異的な耐久性を見せつけ、それを寄せ付けない。

ああ、ズボンが恋しい。ズボンならば足が見えないように気を使うことも、走ることを禁ぜられることもないのに。

淑女らしく丁寧に歩くのも、この視線の嵐の中では億劫だ。本能的に帰ろうとしてか、ぴたりと止まりかけた足に気づいて、ぼそりとジムナスが声をかけてくる。

「……ルナディア、諦めなさい」

「わ、分かっています」

揺れる瞳で父を見上げ、足を叱咤して無理やり一歩踏み出す。

痛い。

視線が痛い。

闘技場のそれよりも敵意が籠っているように感じたそれは、彼女が歩く度にまた違う何かへと姿を変えていることに、ルナディアはまだ気づいていない。

ただ前を向き、父に添えた手が震えないようにするので精一杯だ。

・・・生まれた時から、デビユタントに向けてのレッスンは受けてきた。しかし、それはある時に捨てたはずだった。自分がデビユタントをしない、伯爵家の娘、貴族の娘として生きないと決めた時から。

まさか、こんなところで本番がこようとは。

視線を嫌がり、そしてこれからを嫌がり、後ろを向いて走り出しそつになる足。震える手。

こんなにも人の視線とは身に突きささるものだったか。

その上、自分らしからぬ緊張をしている事実にも、ルナディアは自嘲の笑みを刻んだ。

そつと今の自分を見下ろす。

オフショルダーの藍色のドレスは、レースが最初に比べればだが、慎ましくあしらわれている。最初のドレスはど派手すぎて遠慮し、散々目立たないようにと言ったが、これが限界だと押し切られてしまった結果である。

サテンのドレスグローブには細かい刺繍。剣を嗜んだ手を隠すには、グローブは欠かせなかったのだ。

腰回りはギャザー仕立てで、彼女の引き締まったくびれを強調する。裾は足元に行くにつれてふわりと靡くように。

結いあげた髪は、首元に少しだけ遅れ毛を垂らし、一体どうやってやられたのか。自分の頭だというのによくわからない程、込み入った編み方をされている。

耳と首には控え目に、彼女の瞳と同じエメラルドの宝石を散りばめた。

ルナディアは、言うなれば三日月だった。  
母のステイルルナが、その燈色の髪から太陽のごとくと呼ばれたように。

姉のジェステイナが満月と呼ばれたように。

周りは気付き始めている。彼女の魅力に。  
その証拠に集まる視線はもう最初のそれではないのだ。

しかし、それには気づかずルナディアはまっすぐ前を見据えた。

これから現われるであろう、まだ主のいない席を。

これからの自分の最大の敵を。

「ああ、ドルトナンド伯爵」

その声に親子共々振り向けば、きつちりとした服に身を包んだ男が、グラスを片手に近づいてくるところであつた。

紅の髪は、ところどころ色が抜けているが、見間違えようもない。確かに、この色と同じ色を持つ人間をルナディアは知っていた。短く生やした鬚。皺を刻んだその顔には厳しさが滲み出る。あの人が年を重ねれば、きつとこつという風になるのだらう。

ジムナスがそちらを向き、笑みを浮かべた。その笑顔の裏に何を思っているのかは、実の娘であるルナディアすら窺い知れない。

「宰相殿ではありませんか、息災ですか？」

「ええ、おかげさまで。そういえば、この度はうちの愚息が申し訳ない。お嬢さんがデビュタントというのに、愚かにもエスコートを買つて出たとは。いやはや」

「いえ、ありがたいお氣遣いでした。ありがたく受けさせて頂こうと思つたのですが、この会が初めてとなりますので、この娘も緊張しているだろうと妻が心配しましたね」

「そうですね、今までは大変でございましたでしょう。よかったですな、お体の方が回復しまして。是非楽しんで頂きたい」

「ありがとうございます」

ルナディアに向きなおると、彼は紳士の礼を取つた。口元は笑み

の形を形どっているが、その目は、笑っていない。

「紹介が遅れました。宰相職についております、オレッドと申します。ご機嫌はいかがでございますか、ルナディアさま」

「お初にお目にかかります。ルナディア・ドルトナンドです。先の<sup>せん</sup>気遣い、本当に痛み入ります。正直今も緊張しているのです、楽しめるか不安ですわ」

「王もあなたを気にかけていらっしやる。何かあれば、私にもおっしゃってください」

「ありがとうございます」

「それにしても奥方様、姉上様ににて美しくていらっしやる」

「そんな」

「ご謙遜を」

お互い笑いあう。どうやら宰相殿はあまり顔の筋肉が発達していないらしく、笑う、といっても本当に僅かに口角が上がる程度だ。彼はふいにちらりと視線を巡らすと、ある一か所で止めた。それを追ったルデイの視線も、固まる。

それを見逃さず、彼の瞳にちらりと灯がとまる。

「ああ、あちらに我が愚息がいますね。申し訳ない、挨拶をさせましょう」

「いえ、そんな・・・」

「ハバーニール！こっちへこい！」

いやあああああ！！！！

一回会ってるのよ？！男装で！！やめて！！  
どつするの？！これ以上の面倒はいやよ！！

その心の声は届かず、スーツに身を包んだハバーニールが近づいてくる。彼の引き締まった体軀をスーツが形どっている。目の前にいる男よりも、まだ色味が鮮やかな紅の髪は、今日は撫でつけられている。

ルナディアに気づくと、はっとしたように眼を見張り、気まづそうに視線を泳がせた。

気付かれているのかしら。それとも。

「何をしている、挨拶しろ。ルナディア殿がお待ちだぞ」

なんとか視線をルデイにとめてハバーニールが礼をした。勿論、眼を合わせようとはしない。好都合だ。

長たらしい挨拶の言葉とグローブへのキス。その耳が若干赤いのは、あれか？ シャンデリアの光に髪の毛の色が反射して・・・そんなわけないか。

それでもなんとか一瞬視線を合わせた彼が、眼を見張った。

何かを言いたそうに、唇を僅かに動かそうとしていたが、言葉にはなっていない。

手を離すことを忘れていいのか、未だ握られたままの手をルデイは困ったように動かす。

すると慌てたようにハバーニールがその手を離れた。闘技場での余裕ある表情しか知らなかったため、彼のおっちょこちよい、ともいえる様子にルデイは首を傾げた。

・・・もともところというキャラなのかしら？

その時、この広間のどれよりも痛烈に突き刺さるような視線を背

中に感じて、ルナディアは思わず視線を巡らした。  
そして、止まった。

睨みつけるは、金の髪の娘。

ファルナールの輝くようなそれと比べれば、圧倒的に暗い紅の瞳には、隠す気もないのか、それとも隠すすべがないのか。嫉妬の炎が渦巻いている。

・・・ああ。

例え自分に向けられていても、ルナディアはそれに反発心を覚える事はなかった。

嫉妬をするのは独占欲。女の我儘だ。

可愛い我儘じゃないの。

自分だけを見てほしいのでしょうか？

自分だけを愛してほしいのでしょうか？

自分は多くを愛し、何よりも自分を愛しているというのにな。

でもそれも、女だから許してあげる。

それも可愛さよ。

言葉にしたのではない。ただ口元だけで嗤ったルナディアに、金髪の彼女はその瞳を恐怖に染めた。ぱつと俯くように、その顔を隠す。

怯えさせてしまったか、と若干ルナディアは反省した。何も視線で責めたつもりも、貶めたつもりもないのだ。ただ、純粹に愚かな

ほど可愛い女だと思ったただけだ。その結果の笑みとしてはよろしくなかった。うん。

しかし、自覚は必要だと思う。無知の結果、何を喚こうとそれは誰の耳にも聞き入られないのだから。そのルナディアに言わせれば可愛い愚かさも、一歩間違えば凶器足りえる事、それは身を滅ぼすこと。それを分かっていなければならぬ人種だろう、彼女は。

俯く彼女は、何時もならば取り巻きが気を使ってくれるだろうが、取り巻きの令嬢たちはルナディアたちに釘づけである。ぼつんとまるでそこだけ切り離されてしまったかのように、彼女は一気に孤独となった。

彼女よりも輝いている存在がいることで、彼女はまるで置き忘れられたかのようで。怯えに震えるその瞳を支えるものなどありはない。

何か、声をかけたい。

ただその衝動から、ルデイは一步踏み出そうとしたが、それは広間に響いた声にあっけなく止まってしまった。

「間もなく国王陛下がいらっしゃいます。どうぞ皆様、それまでお  
くつろぎくださいませ」

そう、もうすぐ来るのね。

さあ、二度目の勝負といきましょうか。

ルナディアは拳を握り締めた。

私は、あなたとは、結婚しないわ……！



**令嬢、舞踏会へ行く(後書き)**

次回、王が登場です。

今回もキャラが増えましたが、大丈夫でしょうか。

ここまで読んでくださった方に、感謝を！

陛下、舞踏会に登場する(前書き)

陛下のキャラが大変なことに。

そして登場だけでこの回ry

・・・どござっ！

## 陛下、舞踏会に登場する

ああ、もうすぐだ。

愛しい女の晴れ舞台を自分が整えた。

そのことがどれだけこの胸を躍らせていることか。胸を躍らせるようなことなど、彼女に会ってからだ。

それまでは政務、政務、政務で埋め尽くされていた日々。

急にこれを催すに当たって突きつけられて政務も、今回ばかりは苦もなく消化した。完成した書類を束ねて渡してやったら、やたら驚いた眼をしていたのは痛快だったな。

正装とは名ばかりの、ただの重荷でしかない衣装も今日ばかりは気にならない。

その美麗な顔に微笑を乗せる。それが誰を想ってかを問い詰めようなどという猛者にはここにはいない。問い詰める必要もないのだが。しかし唯一、近衛騎士団であるルイザはその瞳に確かな敵意を滲ませて王を睨みつけた。そこに宿るは愛しい妹を思う兄の心か。

「……王、貴方には、あの子を譲るわけにはいかない……！」

周りの人間になるだけ聞こえないようにと零した言葉だが、地を這うような低さと威圧感を兼ね備えていた。

ぎらぎらと燃える彼の騎士の視線を真正面から受けて、それでも

王は笑った。

「……残念だが、私が貰う」

途端に火花が散りだすのを止める人間が、今回はいた。

「王、お急ぎになられませんと。想いの方が、他の方とのお話に花を咲かせているとも限りませんよ？」

珍しい、秘書という一政務の補佐をする立場の人間らしい一女が、その長い前髪を耳にかけ、王に催促とも脅しともとれる言葉を伝えた。

無表情なのが若干気になるところだ。

ここで普通の王ならば「なんと無礼な女か！この私に向って」などと首切り！とまでされるかもしれない。まあここまでいったらだたの暴君だが。

しかし、王には効果覿面だったらしく、「それは困る！」と叫びにも懇願にも似た声をあげてその顔をきつと引き締めた。

……この国の王は、少しずれている。彼の視線の先には、もう一人しかいないのだ。それが気に食わないルイザスは、その秀麗な顔を顰めた。

その様子を、事情をそこまで知らないのか、それとも知っていてなのか、至極楽しそうに秘書は見つめていた。

とにかく今の彼はふざけている時の顔ではない。

人の上に立つときのそれだ。

その眼に宿るは絶対的な「力」。

人を従わせ、跪かせ、頭（うぶ）を垂れさせる。

ただ美しいだけでは人は従わない。

カリスマとは、外面だけでなく、内面からでるものだ。

それは生まれもったものを磨かねばならない。甘やかされ手入れを怠（たま）ったくすんだ珠を、誰が崇めようか。

それが人の中で顕著に現れるものこそ、目である。

人は最初に目を合わせた瞬間に推し量るのだーその者の技量を。

自分より上位か、下位か。はたまた比べるまでもないものなのかー相手には知性があるのか？それとも愚者なのか？

賢い人は、一目でそれを見抜くという。

口のように音を出すことはないが、口よりも雄弁に語るのが眼だと、レーナルトは剣術の師に教わった。

だからこそ眼を逸らすのはー負けを認めたも同じ。レーナルトは、だからこそこの欲の塗れた世界ではその眼に常に力を宿す。

・・・その力を得るためにどれだけの苦勞を彼がしたのか。埋もれていた才能はある時を切欠にその身を結ぶことになった。

それを知っているのは本当にごく一部の者だけだ。

ただその切欠の中心にいたものは、まるでそのことを分かっている

ないのだが。そう、台風の目のように。

「扉を開けよ」

先程の軽口など微塵も感じさせない、威厳を伴ったその言葉に従って兵士たちが扉を開ける。ゆっくりと―静かに。

開けた瞬間にその嫌味なまでの眩しさに顔を顰めたのは、王である自分だけではないはずだ―

目に毒なような光が満ち溢れる会場。そこにいるのが彼女だと思えば、まだ、苦痛ではない。

踏み込んだ先に溢れるのは、輝かしいものだけではない。

そこを威厳をもって見渡す。

王は自分であるということを示すために。

しかし自分の眼は確かに一人を探していた。

―自分でもどうしようもなく、ただ本能的に。

そして、見つけた。

ああ。

確かに。

「……ルディ」

囁きにも近い声は、誰にも聞きとられなかったはずだ。

なんて美しいのか。しつとりとした印象を与えるドレスは、彼女自身の抜き身の刀のような美しさもあいまって、まるで三日月のようだ。

彼女のこの姿、見せびらかしたいと同時に閉じ込めてしまいたくなる。あれを視界に収めているすべての目をくりぬいてまわったっていい。

しかし気付いた。

彼女の傍をちらつく紅。

自然と綻びかけていた口元が引き攣り、一瞬にして視界が赤く染まった気がした。

なぜ、お前がそこにいる？そこは僕の―

「ルイザス、すぐにでる」

「仰せのままに」

ぼそりと本当に小さな声だったそれを、己の親友かつ近衛かつ敵は、正確に聞き取り、頭を垂れた。

二人揃って邪悪なオーラが出ている、とは舞踏会場には入れないため、扉の手前で立ったままの秘書には伝える術がなかった。

そして事情を知っている近衛たちですら、知らぬ存ぜぬを通して

いる。

彼らの中では事前にS級重要事項として近衛兵特別緊急会議（仮）により可決されていた事実である。このことは隊長であるルイザスは知らない。

「おれたちの仕事は、あくまでも陛下をお守りすることであって、人様の恋愛事情で殺されることではない」  
というのが満場一致の結果であった。

かつん。

いつの間に扉を開けたのか。

羽のようにふわりと王は席に着いた。王の後ろにすっとルイザスが控える。

その瞬間に水を打ったように静まる会場。まだ若い王であるというのに、その美貌からか、それとも実力からか。彼はその存在だけで周りの人間を黙らせたのだ。

ちらり、と視線を巡らす。

そこにあるのは、好奇、羨望、嫉妬、欲望、侮蔑。

全てがいいとは決して言えない彼に浴びせかけられる視線。誰が上に立とうとも、必ず反発派はいる。

それでも彼はまるでその視線には臆することもなく、ゆるりと笑った。

「ようこそ。会は楽しんでいただけていますかな？」

その笑顔は、遠くから見てもキラキラしていた。そう、きらきらだ。きらきら。あれね、顔の無駄遣いってやつだわ。思わず顔を顰めたのは、ルデイだけかもしれない。起こった拍手を手を挙げて王は制す。

「・・・では、杯を」

その言葉と共に彼が手をあげる。その手に握られているのはグラスだ。中に注がれたのは上等なワイン。

皆がそれに従い、各々の手を持ち上げていく。ジムナスもハバーニールも宰相も、勿論ルデイもフットマンから渡されたグラスを持ち上げる。

「乾杯」

にこり、と笑ったその視線が、自分のそれと絡み合った気がした。

乾杯の直後、グラスを置くとともに彼は椅子から降り、そのまま舞踏会の真つただ中へと進んでいった。

ルイザスも付き従うかのように階段を下りていく。

途端にまるで群れるように集まる令嬢たち。

彼は一瞬引いたようだったが、なんとか笑顔を作って対応する。それでも何か焦る様に、じりじりと前に進んでゆく。

彼に訝しげな視線を向けていたルディだったが、そこだけまるでホットスポットのように熱しあがっている令嬢たちが、彼の行く手を阻んでいる以上安心である。

兄のルイザスマでもがどさくさに紛れて腕を掴まれているのは、まあ・・・いつものことだ。

宰相との挨拶もすんだことだし、父ジムナスに風に当たりたい、とでも旨を伝えようとした時。

突然だった。

「あなたにききたいことがあるのです・・・っ！」

何やら必死のハバーニールに急に腕を取られ、ルディは驚きに目を見張る。何かに焦る彼は、若干顔を朱に染めている。

自分のサテンのグローブが、ぐっと掴まれて皺が寄るのが視界の端に映った。逃がさない、と言わんばかりである。

な、何？

一瞬訳が分からず困惑したルディは目を見開いて固まる。

彼の蛇のようだと思った瞳は、今や子犬のそれ。

そんな目を向けられる理由が分からず、ルディは眉根を寄せた。

淑女らしい対応を、と口を開こうとして突如感じた、視線。  
思わず、巡らしてしまった。  
ハバーニール越しに合ってしまった、それ。

にやり、と笑う、彼。

突如人を寄せ付けけないオーラを放ちだした二人に、危機感を感じてか傍にいる人間がすつと道を開けていく。  
じわりじわりと人混みをかき分け近づいてくる、彼の王レーナルトの目に宿っているのは、穏便な光ではない。  
目の奥でちろちろと揺れている光を直視してしまった。その途端にまるで電流の如く背筋を駆け上がる何か。口から悲鳴に近い声が僅かに漏れた。顔も真っ青だったかも知れない。

憎悪でも、軽侮でもない。楽しいものでもないそれ。

腕を掴むそれよりもより深く、まるで中身が雁字搦めにされてしまっようだー

いくなればそれは、底知れない『熱』だった。

結婚したくない意志は変わらない。面と向かってだっていう自信はあった・・・はずだった。けれど自分の本能が告げる。

逃げろと。

この男は危険だわ！！  
私の操的な意味で！！！！

令嬢が決して口にしてはいけない部類の言葉を、心内でぶちまけ叫んだルナディアであった。



陛下、舞踏会に登場する（後書き）

なかなか更新ができません。

それでも待つてくださる方がいると信じて・・・

誤字脱字があればこっそり教えてくださるとありがたいです。

アクセス22万いきました！ありがとうございます！

こっそり喜んでいきます！

令嬢、ダンスを踊る（前書き）

ルデイがなかなか動いてくさいます。君にときめきはないのか。

## 令嬢、ダンスを踊る

じつとまだ熱っぽく見つめてくるハバーニールと、彼の背の向こうにいる存在にちらちらと視線を向ける。どちらの視線も無視できないほど強い。

背筋を滑り落ちる汗。

なぜ自分がそんな目で見られているのか。

王は周りに集まった令嬢を捌き切ったらしいが、次は挨拶回りの貴族たちに捕まっている。

兄は令嬢を捌き切れず悪戦苦闘中の模様。

不幸中の幸い。とにかくこれを打破しなければ。  
ごくりと唾を飲み込んで、ルナディアは無理やりに笑顔をつくった。

「ええ、私に答えられることなら・・・ですが少々お時間を戴いて  
も？」

途端期待に目を輝かせたハバーニールが、思わずといった具合に  
ぐっと腕を握る手に力を込めた。

ずぶりっ！と効果音がしたかのように錯覚するほど、彼の後ろか  
ら鋭い視線が突きささるのを感じた。

「っ・・・!!」

体をずらしたハバーニールによってその視線は遮られたものの、  
まだ嫌な汗が止まらない。

父に救いを求めようと視線をやったが、帰ってきたのは苦笑のみ。  
父ですら匙を投げるってどういうこと　　?!

視線をハバーニールに戻した時だった。

腕が引かれる。

え？

と思った時にはもう、自分の手はしっかりと組まされていた。

レーナルト王の腕と。

「……！」

ここで悲鳴を上げなかった自分をほめてほしい！

「ああ、ルナディア嬢。この度は招待に応じてくれて感謝している」

王がにこりと笑う。

啞然としているのはルディだけではないらしく、傍にいたハバーニールもその目を見開き、固まっていた。

王にぎろりと睨みつけられ、ハバーニールははっとしたように一礼してその場を譲った。

勿論その瞳が燃えるように輝いていたのを、レーナルトは見落とさなかったが。

「折角はじめての舞踏会だというのに、お待たせして申し訳ない」

再び笑いかけられて、にこりと愛想笑いを返したが、どうも効果音に濁点が付いた気がしてならない。

「お詫びといっってはなんだが、私と踊っていただけかな？」

周りで一斉に悲鳴が上がった。  
勿論令嬢たちの。  
ちなみにルデイの心の悲鳴も。

王から指名されるとはこの上もない名誉。何より王妃への直通便。我こそは！と思う令嬢ならば必ず狙うポジション。

「君を初めて社交界に連れ出したのだから、これは王としてでなく、主催者としての義務だと皆分かってくれているよ」

まるでルデイの心情を見透かしたような言葉だ。

ルディは愛想笑いを浮かべる。

「いえ、そんなお気遣いなど……」

「ばらすよ？」

その言葉に愛想笑いも剥がれおちた。

視線も言葉も剣呑になっていくのを止められない。一度でも刃を交えた相手に、どうして他の令嬢と同じ反応ができようか。

そしてこの台詞。

喧嘩を売られているのか。

「……脅しですか？」

「そうまでしてでも君と踊りたいと取ってほしいな」

「無茶をおっしゃいますね」

先程とは比べ物にならない程ギスギスと言い返すルディに、レーナルトは微笑んだ。

「……よく笑うわね。」

とかなんとか思っていたら、とんでもない爆弾を投下された。

「君の初めてをいろいろと貰いたいだけだよ」

・・・は？

なんですと・・・？

フリーズ。

いやいやいや勘ぐりすぎよ。落ちつけ私。

今のはほら、きつと初めていろいろと私が参加するから、気をつかって、ね？

って何が。

ただの変態発現

間違えた変態発言。

いやいやいや王が私にそんなことというはずないじゃない。

イヤ、ていうか全力でお断りですけど。

だめだ、この人に付き合ってたら私の男装かつ女性ハーレムライ  
フが

思考停止している間に、ぐいと体を引かれる。

え？

曲が始まった。

あら不思議。

どうして舞踏会場の中心にいるのかしら。

どうして見計らったように曲が始まるのかしら。

どうして目の前の方は笑っているのかしら。

く楽しそうに。

とんでもな

体を自然にひかれて、体が動き出す。

くるりとターンさせられて、周りから拍手が起こった。

当の本人は先程と同じ笑顔でルデイを見つめている。

どうして？どうしてそんな目で私を見るのよ？剣を交えた。  
それ以外は何も無いでしょう？

ルデイの瞳には困惑しか浮かばない。

二人の踊りに加わる様に、貴族たちがある者は妻を、ある者は恋人を、ある者はその日限りの愛人を連れ、踊り始める。

ただしなぜか二人からは一定の距離を保っている。

ダンスは曲が終われば、パートナーを変える事が可能だ。

しかし曲が終わって手を離さなければ、そのパートナーと踊り続ける事ができる。

ルデイの手を握りつぶすほどではないが、離すなど考えてもいない、といわんばかりにレーナルトは力を込めていた。

曲が半分踊る頃には、ルデイの心に一つの決意が芽生え

ていた。

自分は初めて社交界に参加した遅れ花。

咲き遅れにいき遅れだ。

元々周りからの評判は良くないだろう。これ以上落ちる名誉もない！

ならば粗相を犯して二度と王にこの顔を拝ませないでくれようとルデイはいきりたった。

自分が粗相を犯せば、王は誘いにくくなる。自分の醜聞につながるからだ。ただ、実家に迷惑のかかる大規模なものは避けたい。

程ほどでいこう。

可愛らしい初心者のミスを犯すのだ。

そう、間違つてパートナーの足を踏みつけるというのを！

王相手になんてマネ！と他の令嬢なら絶対にしないし、かつそんな女と王は踊らない。

ルデイもそんな粗相を犯すような教育は受けていないし、この運動神経でそんなことは（普通）しない、が。

いや、私は私。余所は余所。

今は異常。普通じゃない。

とルディは納得した。

タイミングが大事だと、ルディは王を窺った。  
王がルディをリードしてターンさせようとその手を引いた。

今よ！

「あら、スミマセツ……！！！」

ぎらりと目を輝かせ、ヒールを渾身の力で叩きこもつと足を上げるー！  
怪しくないように、少しターンをミスりました！という感じを出して  
ヒールが王の足につきささる直前。

「っ……!」

ぐいと体を引かれ、崩しかけた態勢を華麗なさばきで立て直される。

「……くっ!!」

「何か？」

……ムカ。

「いいえ、何も。わたくしの拙いダンス、陛下のリードがあつてこそです……わっ!」

「そうかい、それは嬉しい……ねっ!」

「本当にこんなわたくしをお眼鏡にとめていただいってっ!!」

「君の美しさ、わたしでなくとも目をとめたはず……さっ!!」

三度目のヒールを避けられて、さすがにルディは顔を顰めた。

「おや、もうやめかい？」  
「・・・何のことですか？」

にっこりと笑う両者。

「どつやらこの相手、やっかいなようだとお互い心中で呟いたのだ  
った。」

## 令嬢、ダンスを踊る（後書き）

舞踏会編はなにしてたんだこいつら、みたいな目でみてあげてください。  
い。

誤字脱字、感想などございましたらよろしくお願いいたします。  
ちなみにここは我慢のしどころです。

## 令嬢、再び逃げる

「見てあれ・・・アレンジかしら。面白いわね」

「時折なんだか違うステップを踏んでいるよう・・・」

「さすが王。凝ったことをなさる」

「ドルトナンドも凄い娘を隠していたようだな」

「王にご寵愛されているようですわね」

「どうだろうな・・・ただドルトナンドは」

「ええ、『王の剣』ですものねえ。異例ですわ」

「それでもよいのではなくて？」

「どうするんだ、侯爵家の三人は・・・」

まわりから聞こえてくる声から逃げるようにエルルマリアは窓際  
に移動した。フットマンが運んできたワインを半ば引っ手繰るよう  
にして奪い、煽る。

はぁ、と息を洩らし、口元をハンカチで拭く。

自分という女がいながら、どうして誰も声をかけてこないのか分  
からず、エルルマリアの機嫌は最悪だった。ここで男たちに囲まれ  
でもすれば少しは気分が上がるかと思ったのに。誰もかれもが王と  
そのパートナーを見つめている。

王もひどい・・・わたくしの立場を分かっているの？！

他の取り巻きたちは我先にとダンスに参加していった。

しかしなぜか今日は参加する気にもなれない。

黒とともに舞う銀を見つめながら、エルルマリアは唇を噛みしめた。その赤いルージュのせいで、まるで唇から血が流れているようだった。

反射する光が眩しくてルナディアは目を細めた。  
気づけば周りではさまざまな貴族が躍っている。  
そのど真ん中にある事がとんでもなく苦痛だ。

・・・貴族は嫌いなのに。

だから逃げようと思っただけの行動だったのに、とルナディアは眉を

顰めた。

そろそろこの戦法も無理ね。

さすがに5回やって5回避けられれば諦めも出てくる。

しかもなれないヒールは着実にルデイの体力を奪っていた。

もっ、どうでもいい。

とにかく帰りたい。女性に癒されたい。男装したい。

結論、面倒くさい。

曲も終わりを迎えようとしている。

ルデイははつきりしないことは嫌だった。一体なぜ自分がこんな目にあっているのかハッキリさせておきたくなった。

更に言うならこのまま二曲目にでも持ちこされることがあれば、心が折れてしまう。色んな意味で。なのでさっさと聞いてしまおう、とルデイは口を開いた。

「・・・直球でいかせていただきますわ」

「何かな？」

踊る足を止めずに王は返事をした。一国の王だというのに、会ったばかりの女の質問を許すのか。とルデイは自分から言い出したことだが呆れた。

「ここで嫁にしてくれ！とでもいいだしたらどうするのだろう、と思っただがやめておいた。もし受け入れられたら自分の男装ライフがサヨナラだ。それは本当に嫌だ。心が折れる。女性は私の心のオアシスだ。奪われたらたまったものじゃない。」

「どうして私なんです」

「意味を量りかねるな」

「・・・社交界に出ていなかった、珍しい娘だからかまうのですか」

ルデイの碧色の目が探る様に輝く。レーナルトの顔から笑みが消え、ルデイの視線を真っ向から受け止める。

「違う」

「兄に似ているから」

「違うよ」

少し不機嫌になってきたらしく、彼の眉間に皺が寄った。ルデイの方も溜息をつき、本当なら出したくなかった話題を口にする。

「あの件で・・・戦ったからですか」

「これであの剣士が自分である、と完璧に認めてしまった。言い逃れはできなくなった。しかしやはりこの話題だったのか、彼の眉がぴくりと動く。」

「……それはすこし」

視線を伏せる彼は言葉を選んでいようだった。その言葉を聞いてルディは声を荒げた。

「私のドルトナンドの力が欲しければ、父にいつてくたさいませ。力をお貸しできるかと。ただし男装でお願いしますが」

こんなことはまっぴらだ、という気持ちを盛大に込めて、睨みつけながらいつてやる。

けれどもこちらの期待に反して今度は彼の雰囲気さがらりと変わった。

「それはかなり違う」

完璧に怒っている。美形、しかも一国の王のそれはかなりインパクトのあるものだったが、整った顔なら毎日家で見ているし、怒りを買うこともしょっちゅうのルディは怯まずに逆にその声を低くした。

「……何が違うんですか」

ルデイの視線つけて、はっとしたようにレーナルトが目を見開いた。戸惑うように揺れる瞳からは先ほどの怒りは消えている。じつとルデイを見つめてくるので、気まぎれになって視線をそらしたくなつたが、何となく負けな気がして更に睨みつける。

彼はやはり言葉を選んでいるらしく、何度か目を瞬かせた。

いつまでも口を開かないレーナルトに、ルナディアが痺れを切らして口を開こうとした時。

「私は・・・僕はそんなことを求めていないんだ」

すごく優しく微笑まれて。

ぼっと顔が熱くなった。

な、何?!

王も驚いたように眼を見開いた。  
きつく握られていた手が緩む。

そして丁度曲が切れた。

ルディはその隙を見逃さず、するりと王の腕から抜け出した。あまりの速さに王もついてこれず、あっけに取られている。

「つつつし、失礼しますっ!!!」

「え、待つ・・・!」

叫ぶようにして去っていくルディは、あっという間に人ごみに紛れて見えなくなる。

慌てて一歩踏み出したが、残されたレーナルトの手を我先にと争うようにしてあっという間に令嬢が集まり、ルディを追うことを不可能にしてしまった。

あの後淑女たちに散々囲まれ、踊らされ、レーナルトは精神的に疲労困憊だった。

踊っている間もルディを探したが、見つけられなかったし。

このときばかりは自分の容姿が泣く子も黙る鬼のようであればいいと思うのだ。下手に目尻が下がっている（他の人間に言わせればフェロモンたれ流し）の顔をしているから、皆容赦なく寄って来る。そしてそれを断れない。妻がいない自分には断る理由がないからだ。誰もかれもが王妃の座を狙っているというのに、そしてそれをその中の誰に渡すつもりもないというのに全く面倒なことだ。

王座に戻ってそろそろ酔いが回ったダンスの輪を見つめる。レーナルト自身はそこそ酒に強いので、酔ってはいない。

更に一口酒を口に含んだところで、一人の男性が挨拶のためにか、自分から離れたところで頭を垂れた。

それを手を挙げて許可すると、彼は微笑んでレーナルトの傍に寄った。

「王、お久しぶりです」

「ああ、ボルチェニカの次男か」

本当に久しぶりに見た顔だ、とレーナルトは頷いた。レーナルト自身が会を開いたのが久しぶりだし、彼自身は各国を飛び回ってい

るといふ。次男坊だからこそできる技だ。

「はい、挨拶が遅れた上に、妻を連れずに参ってすみません」  
「妻？」

「はい、ジェステイナといいます。今は別件で席を外してしまして」  
「ジェステイナ・・・？」

「旧姓はジェステイナ・ドルトナンドです」  
「！」

彼は空色の瞳を細めて、人好きのいい笑みを浮かべた。

「王、ルナディアにしか本当に興味がないのですね」

言っていることは腹黒だが。レーナルトが返事に窮しているのを満足げに見つめ、彼は更に声を低めた。

「・・・先ほど彼女が、私の義妹が北の外れの方のバルコニーに行くのを見ました」

「?!」  
「ハバーニール殿もそちらに向かっていかれましたよ」  
「っっ」

慌てて立ち上がった王の手をライアスは掴んだ。彼の行動にルイザスが剣の柄に手をかけるが、それをライアスは目で止めた。王を

害するつもりはない、と。  
そしてその視線を王に向け直す。

「どちらにいかれるのです」  
「なにを・・・！」

王の何時になく冷静さを失い、鋭さを増した視線を真正面から受けてもライアスはひるまない。逆に面白そうにその双眸を細めた。周りにいる近衛たちはびくりとその体を揺らしたというのに。

「あなたは分かっているらっしゃると思っていましたか？あなたは王です」

「・・・」  
「はつきりいしましょう。今日の行動は度が過ぎている。これは私が彼女の親族だからということではなく、一貴族としての忠告です」  
「・・・分かってる」

「・・・ジエステイナに、行かせましたのでご安心を」  
「・・・感謝する」

すたん、と腰をおろした王は、再びぐいとワインを煽った。

「飲み過ぎな方は嫌われますよ」

と、言われた途端ぴたりと行動を止めた王に、ライアス・ボルチエニカは「からかいがいがあります」などとのたまった。

「らしくないですね、陛下。女性の扱いは慣れたものでしょう?」

「・・・」

「ダンス中にももっと話しかけるチャンスもあったでしょうに。何をしているんです」

きみはどっちの味方なんだ、と呟いたら彼はふふんと鼻を鳴らした。

「私は面白いことが好きだけです」

「・・・奥方にそっくりだな。彼女はよくルイザスをからかっていると聞いた」

「あれよりはまだ私の方が可愛いですよ。正直ですから」

それで?と先を促すライアスに、レーナルトは少し気まぎれに視線をそらした。

「・・・見つめたら」

「?」

「そしたら、なんか幸せで」

もっと話しかけるとかそこまで思考が辿り着かなかった。  
などのたまう王に、ライアスはだめだコイツ、などと思ったが  
口には出さなかった。

## 令嬢、再び逃げる（後書き）

ありがとうございました！

舞踏会編は出てくるメンツもいろいろと付箋ばかりになっていて、でテンポは遅いです。読みにくいかもしれませんが・・・許してくださいっっ！！

あと1、2話程度で舞踏会編終了予定です。  
もし誤字脱字ありましたら教えてください。

陛下、政の顔をする

「王、お酒はその辺で」

何杯目かのワインを飲み干そうとしている王に、ライアスが声をかけた。

彼が酒に強いことはしっているし、王たる者このような席で酔いつぶれる事はないだろうが。

レーナルトがその声を受けてちらりと視線を上げた。

「なぜ君にそう言われなければならない？」

「・・・お話がございます」

「それは、君が私に黙って国境の領地に手を出した件か？」

するりと出てきた彼の人の言葉に、ライアスは息を呑んだ。やはりという思いとまさか、という思いがライアスの中でせめぎ合った。

「・・・はい」

「私は他の者に任せただけだがな」

「はい、ですが」

「誰が許可した？」

まだダンスは行われ、熱気が渦巻いているというのに、まるで王の周囲だけすうとその場が冷えた気がした。

横に控えたルイザスも、神妙な面持ちでこちらを見ている。彼も先程の会話は聞いていたはずなのに、動こうとはしていない。自分の役割を分かっているのだろう。

先程自分に対して無言で剣を抜こうとした。自分のことを義兄と知っているくせに、面白くない奴である。まあ彼は後で義兄としてからかう機会があるだろう、それを楽しみにするとするか、とライアスは一人ごちた。

そのルイザスも年中冷氣発散中で有名である。(一部例外あり)そして今も。

その二人の視線を受けて、ライアスはその背中に汗が流れるのを感じた。この自分が気圧されていると気づく。まるで先程と違うではないか、と心内で笑う。まだ先の方が可愛げがあったというものだ。

「一体誰が許可したのだ？言ってみよ」

グラスを指先でもてあそびながら、レーナルトが薄く笑う。

「申し訳ございません」

「私が命ずれば、た易く飛ぶ首だということをわきまえよ」  
「は」

お前の命など今捨てて構わないと言い切る王に、つうと首筋を冷たい汗が伝うのをライアスは止められなかった。

これが、王か。

自分より年下の王は、言いようもない絶対的なオーラをその体から放ち、静かにライアスを見つめていた。

しかし口調を崩して、ふいにその視線をグラスに向けた。

「途中から方針が変わったのを聞いてな。それに私が当てた人材では、あの速度であそこまで解決できまい」

「お褒めの言葉ととつても？」

「構わない」

「ありがたき幸せ」

レーナルトがまた酒を口に含んだ。味わうかのように口の中で転がし、のんびりと飲み込む。

大人しくそれを待っていたライアスに再び視線を向ける。

「それで？お前が出てこなければならぬほど切迫していたということか？」

「というより、深かったのです」  
「ほう？ではあれでは解決できないほどにか」

自分が当てた新領主をあれ呼ばわりするレーナルトは、少し考えるように眼を細めた。

それにいいえ、とライアスは首を振った。

「わたくしが到着したとき、財政の問題はほぼ片付いていました」  
「・・・何があつた？」

「紙面上は、の話だったのです。あれなら放っておけばまた腐敗が進んでいたでしょう。それはまだしも、領地の詳録を当たりました所、どうもきな臭いことがあります・・・」

それ以上は言葉を濁すライアスの眼を、レーナルトは見つめ返した。

「・・・私の耳になぜ入れなかつた」

「申し訳ございません。わたくしの方でも確固たる証拠が得られず、かつ王や私が動いていると知られるとまずいと判断いたしました」

本当なら現時点でも話すべきか迷っている、とライアスは苦笑した。

それだけの相手が隠れていた、ということか。

「私の意見を仰がずして、貴殿が判断するのはおかしくはないのか？」

「・・・はい。このような身勝手な行動、この首差し出すのも覚悟の上です」

それを聞いて、レーナルトはふっと笑った。一気にその身に纏っていた冷気を引っ込め、彼は立ち上がった。

「別室に行こうか」

ここではまずいだろう、と政の顔をしたレーナルトがその身を翻す。

「ルイザス、ついてこい。他の近衛は警備面での確認をしる。直ぐにだ。そろそろ帰る者たちも現れる」

了承の意を示して近衛達がその胸に手を当てた。

レーナルトはちらりと視線を巡らし、眼にとまった近衛を指差した。

「その。宰相に私はライアス殿の旅中の話を聞くと伝える。後は彼の方が手を回してくれるだろう」

以上だ。

その言葉を残して去っていく王を、残された者たちは全員その頭を垂れて見送った。

「うはあ  
」

あ、間抜けな声がでた。まあいいわ。誰にも聞かれてないはずだ

しね。

にしても疲れたわ。

手を手摺に付けて、持たれかかる。これ以上人に構うのが億劫で、少し離れたバルコニーで風に当たっている。

開け放した窓から溢れるカーテンの奥に、舞踏会場の光が見える。ざわりざわりとした喧騒は、まだ続いているのだ。勿論それに戻るつもりはない。

足もとからふわりと風が吹いて、ドレスを弄んでいく。涼しさに目を細めた。

はたはたと手で顔を仰ぐ。不作法極まりないが、誰も見ていないからどうでもいい。先程から引かない頬の熱。ぐうと唸ってルナデアはその頬に両手を押しあてた。

「風邪でもひいたかしら」

やっぱりこんな肩だしの格好なんてしているから、体が冷えて熱っぽいことになってるのよ。うん。

もう何年も風邪ひいてないはずなんだけどね。

黙れもう一人の自分。

「・・・帰ろう」

お父様を探さなくちゃ。

「それは困ります」

背後からかけられた声に、はつとして振り向く。

確かにそこには人が立っていた。光で顔の部分が影になり、はつきりと見えない。その人物がゆっくりと近づいてきて、ルナデアは怪訝そうに眉をしかめた。

やがてはつきりその人物の顔を見てとれるようになる。

「先程聞けなかったこと、お聞きしたく存じます」  
「ハバーニールさまでしたか」

また面倒なのが。闘技場の時から思うが、彼はどうも本当に蛇のようだ。しつこく獲物を狙うその目が、きゅっと細められた。

「私はある人を探しています。ある時から、ずっと……」

彼は見据えるように、そして探る様にルナディアを見つめている。  
「あなたはその方にそっくりだ。貴女と同じ目の色。もし貴女がその靴を脱いだならば背格好も近い……」

振られると思っていたネタだが、いざ振られてルナディアは困惑を隠しきれなかった。なんのことでしよう、と白を切るには今のルナディアは分が悪い。ただでさえ心内はぐちゃぐちゃだというのに  
「関係ないとは、言えないと思いますか？」

ざらりとその瞳を輝かせ、ハバーニールがまた一歩前に出た。  
「もしや」

そこで彼は言葉を切る。

「げ。まずい。」

眼を彷徨わせて逃げ道を探すが、入口にはハバーニールが立っているためバルコニーから飛び降りるほかがない。

さすがにそれはまずいか……。ドレスだし。意外と高

いわね、王城。これはさすがに死ぬかも。

ひやりとしたものが背筋を這うのを感じ、まるで対するようにつばいハバーニールの視線にひくつと喉が鳴った。

しかしその次の彼の至極真面目な顔をした言葉に度肝を抜かれる事になる。

「もしや貴女の御親戚ではないでしょうか」

「は？」

あまりにも間抜けな声が出た。と、慌てて口を閉じる。

え？令嬢？誰が？知らないわよ？口をあんぐりと開けて眼が半分死んでいる令嬢なんて私は知らないわ。自分じゃないわよ。

そんなルデイの思考とは裏腹に、ハバーニールはその拳を握りしめ、熱弁する。

「そうでないというにはあまりにも似すぎている！違つのは彼の方が自信に溢れていたことでしょうか。後は髪の色、性別……」

本人です。とは言えない。おう。

男装の方がじっくりくるから自信持って動いている、なんて言えない。おう。

「連絡先……いやそこまでと言わなくとも彼のお名前を教えてください  
ただけまいか」

何言っているの、この人。

呆れを通り越した感情が走り抜けた。その後に残ったのはなんとも言えない虚無感。一体全体何を恐れていたのか。ばからしい。

・・・っていうかテルミオが男と分かっていて連絡先を聞いているの？大丈夫この人？

完全に黙りこくってしまったルナディアと対照的にハバーニールは語り続けている。

やれ彼は剣技が美しかったただの、何かと謎にみちているのだの、しかし興味をそそられるのだの。

「本人です」と言ってみたくなつたわ。

じわりじわりと近寄ってくるハバーニールにルナディアも距離を取ろうとバルコニーの手摺にそって移動していたが、そろそろ限界だった。

ま、ずい。

「そこまでにしてくださいますこと？」

二人の動きが一齐に止まった。

何事かと視線を向けた方向には一人の女性。口元を豪勢な扇で隠し、その瞳を細める。父と同じ、穏やかそうなその容貌には似つかわしくない程その瞳は面白そうに輝いていた。隠しきれない好奇心がそこにはあった。形容するならぎらぎらと。

「わたくしの妹は不慣れですの。そのように積極的では困ってしまいますわ」

すつとハバーニールとルナディアの間に割り込んだのは長女、ジエステイナ。五年前にボルチエニカ家次男ライアスと電撃結婚。

それまでもルナディアの代わりと言わんばかりに社交界で目立ちまくった彼女は、何がどうなつてか放浪息子と有名なライアスとのそれにより、彼女に思いを寄せる男たちの鼻っ柱を折り、更には大人しくする、という文字が辞書にないらしく、ライアスと共に世界を飛び回るのが趣味というか日課というか。

侯爵家と伯爵家出身の二人だというのに自由すぎる。つけるのは最低限の侍従のみ。ライアスの方は知らないが、ジエステイナは勿論それなりの腕の持ち主。

刺客？なにそれさあ勝負！のノリがあるのが否めない。何しろ楽しそうなことが大好きだと豪語するのだ。自分とは違う方向だが、豪語する方向が一味違う。

ちなみにその感覚はルナディアには理解できない。そして一体どんな夫婦旅行をしているのかはドルトナンド家内でも謎である。

その彼女が、一体何時振りか。その背中をルナディアに見せ、宰相の息子にその顎をつんと上げて対面している。

「・・・それは失礼を」

先程までルデイに見せていた焦りはなんだったのか。ニヒルな笑みを浮かべてハバーニールが一礼した。

まさに蛇だ。うん。さつきまでの熱弁はどこに？今は大分クールガイですね。

彼はジエステイナの退かない意志を感じ取つてか、くつと笑った。

「どつちら、貴女も彼も、ガードが固いようだ」

同一人物です。

っていつか、ガード固いって………何かしら。

令嬢、姉と会う。陛下、その夫と会う。

「お姉さま、申し訳ありません」  
「良くてよ。初めての子には相手が悪すぎるわ」

ハバーニールが意味深な笑みを残して去った後、ルナディアは久しぶりに会った姉への申し訳なさにその眉尻を下げた。それを彼女は一蹴したが。

笑う彼女はバルコニーの端へと歩みよる。ルナディアもそれに続いた。

剣の方面ではかなりだと思っただが、やはりジエステイナのように自分はふるまえない。

しゅん、としたルナディアを見てジエステイナがふるぶると震えた。

あれ？なに？

「……！！そこが可愛いの！あなたは永遠に天然でいて頂戴！……！」

耐えきれないといわんばかりにがばりと抱きついてきたジエステイナに、ルナディアはぎょっと目を見開く。

そのままぎゅーっと抱きしめてくる。コルセットプラスのそれ

に胃の中のものが全て出てきそうだ。

ギブギブギブ！

ばしばしとその背中を叩くとしぶしぶと言わんばかりに放してくれた。がちでやめてください。細そうに見えて素晴らしい筋肉がその腕にはついているのですから。

けほりと咳をして、ルディはやっとのことで解放された自分のお腹を摩った。やばい、コルセットって凶器だわ。

「そつえばいつまでいれるのですか？家にはよっていくんではしょう？。」

ジェステイナは視線だけルナディアに向けると、首を横に振った。

「寄っていかないの?!」

「本当は寄りたいたいのだけれど、今夫とやっている仕事は急を要すの」

すぐに戻らなければ、という彼女はやや寂しそうに笑った。

「・・・何か問題があったのですね？」

「興味本位で引っかきまわしてみたら驚くほど深かったのよ。芋蔓式に引っ張り上げたはいいんだけれどね・・・」

そこで彼女は言葉を切って、眼を反らした。真剣な瞳で暗闇を見つめる彼女は、妹の自分から見ても美しかった。父親譲りのヴァイ

オレットが輝いている。それが憂いを帯びていることに、ルナディアは気付いた。

いつも悠々とした姉を何がそうさせているのか。

探る様にルナディアが姉の瞳を見つめようとした時、姉がそれを避けるように眼を伏せた。

「どうにも、まだ奥があるみたい。それも最大級のがね」

「・・・どうしてそれを私に言うのです？」

姉の仕事に自分が首を突っ込めるとは思っていない。

「貴女は知っておいた方がいい」

「どうということなのです？」

「あまり多くは言えないけれど・・・」

ジェステイナは慎重に言葉を選んでいるようで、考え込むようにそつと唇に指を添えた。

「貴女はこのままだと・・・立場的によくないことになると思う。慎重に行動して頂戴。でも逃げられないわ。もう逃げるときは逃してしまつた。・・・危険にあつこともあると思うわ」

だから道を間違えてはダメ、と繰り返す姉の占い師のように断片的な言葉を拾い集め、ルデイは自分の中でなんとか形成しようとした。

それでも訳が分からないと思う心が表情に表れていたのか、ジェステイナが悲しげに顔を曇らせた。伝えられないもどかしさを持って余しているかのように。

「ごめんなさい、これ以上は言えない」

「・・・じゃあ私ももうきかないわ。お姉さまの立場が悪くなるようなことは、したくないもの」

ジェステイナはくしゃりとその相貌を歪め、ルナディアを抱きしめた。背に回された手に、ぎゅっと力が入った。先ほどとは違う、やさしい抱擁だった。

「私のルナディア・・・！私は常に貴女を想っているわ」

感極まったジェステイナの様子に、今度はルナディアも振り払うようなことはしなかった。その背中にそっと手を回し、少しだけ力を込めた。

「姉さま、私もよ」

「必ずあなたの為になんとかしてみせる」

「・・・ええ」

さっぱり事情は分からないが。

またもや自分でも知らないうちに厄介事に巻き込まれているのだろうか。

しかも姉の言葉のあちらこちらに含まれる警戒を促すものがどうも物騒だ。貴族関係ならば、どう考えても『あのお方』関係だろうなあ。

「・・・お姉さまに危険は」

「あると思うって?」

「愚問でございまして」

「さて、場は整えたぞ。話してみよ」

王城の来客室に入った王はマントを脱ぎ捨てると、ソファにどかりと座り込んだ。くいつと手でライアスを呼び、口角を上げる。

ライアスは彼に指されたソファに座り、すつとその顔を上げると、その顔から笑みを取り払った。

「事の始めから申します。わたくしども夫婦が旅を好んでいるのはご存知ですか？」

「ああ」

「おかげでただでさえ破天荒な姉が好き勝手に各地でドルトナンドの名を売りさばいていることになっていきますよね。ライアス殿」

他に人がいなくなったルイザスが敵意も露にライアスを睨みつけた。どうやらこの義兄をライアスは嫌っているようだ。レーナルトは苦笑した。

するとライアスはにやりと笑った。先程レーナルトを霞に巻こうとしたあの笑顔だ。

「あれも、貴方と同じ目的のため」

ぴくりとルイザスが眉を動かす。その攻撃的だった視線に、訝しむそれが混じる。

この二人の静かな戦いも面白いが、このままでは話が進まない。

レーナルトは手をあげ、二人の会話を止めた。にやりとライアスは笑い、ルイザスはばつが悪そうに顔を反らした。

「身内の話は後にしろ」

「はっ」

「続ける」

本当は本品を持ってこれれば良かったのですが、と前置きしてライアスは話し始めた。

「最初は立ち寄っただけでした。新領主殿の手腕を拝見させていただいて、そのまま旅行を続けようと思ったのですが・・・興味本位でいろいろと見せて回らせていただきましたね。最もおかしかったのは計帳です。時期的に考えても宿が潤いすぎているし、鉾山に囲まれたあの国境地帯に観光客があるとは思えませんでした」

「行商人が来る時期でもないし、あそこは選ばない・・・ということか」

鉾山を越えて行商人が来るなど聞いたことがない。通常は国境を跨ぐように流れる川を下ってやってくる。隣国とはあくまで和平の状態を貫いているが、向こうの動きが怪しいのもあり検問も置いてある。

多少面倒だが、こちらの国は雪に覆われた隣国よりも多くのものが集まる。だからこそ行商人も集まり、王都が栄えているのだ。それを疎ましく思うことも自然なことだ。こちらの方が国が巨大だからこそなんとか今の均衡状態を保っている。

「それとですね、鉱山の方ですが村からやや離れた地点のものに、使用形跡がありました」

「どこだ」

「ハルモナという鉱山です」

「あそこはもう十年も前に廃坑になった筈ですね」

ルイザスが考え込むように顎に手をあてた。レーナルトも頷く。十年も前の鉱山など、今更どうしようというのか。新たな鉱物が見つかったという報告もない。

「・・・形跡とはどういったものだ」

「入口は全く整備されているとは言えませんでした。見た目にも崩れそうなほどに・・・。しかし中に入ると整備が行き届いていました。細い坑道の奥のスペースも含めれば、一個中隊ならばぎりぎり入るほどの広さがありましたし」

「ほう・・・どうしてそれに気づいた」

普通なら見た目でまずいなら入ろうとは思わないだろう？とレーナルトが意味深な笑みを浮かべる。

「おや？とライアスは眉をあげ、口元を歪めた。

「私を疑っていらっしやるのですか？」

「すぐに飲み込めという方がおかしいだろう？」

「・・・ふっ。その通りですね。単純ですよ、土の痕がおかしかったのです。何年も前に廃坑になったはずなのに、土が真新しく、そこらの草が刈られていました」

何かを運んだ痕でしょう？とライアスが言うのに、レーナルトは納得した。

「・・・なるほどな」

「なにを企んでいるやら」

「その鉱山の所有権は誰にあるのだ？」

「村の男のものでしたが、その男は既になくなっていました」

「誰も後継ぎがないということか。廃坑になったと言えど鉱山だろう。管理不行き届きとは笑えるな。実質誰に漁られてもおかしくない状況というわけだ」

「しかしあの規模を考えると・・・どうもただのお遊びということでもなさそうです。資金繰りも今はなんとか持ち直しましたが、領地のどこと通じているか分からない以上、いつまた流れ出てもおかしくありません」

「ここ最近潤いすぎている宿。整備された鉱山。代替わりせねばならない程困窮した領主。立て直したはずだが、いずれまた崩れる事が見えているとライアスに言わしめた資金。」

裏にいるのは・・・貴族か。しかも大物だな。

恐らくレーナルトと同じ意見に達しているのだろうライアスが、  
そういえばと呟く。

「・・・あそこの元貴族、ハッケンベルドといましたか。子供が二人、王都に出てきているらしいのですが、居場所が掴めないのです」

「王都にか？」

「ええ。どうやら賊に入られたらしく・・・すっからかんでしたよ。主人の方もすっかり意気消沈してしましてね。どちらにしる有力な

情報は掴めそうになかったので放置していますが」

「構わない。情報が得られそうであるなら、ハッケンベルドの子息達も探しておくでしょう」

あそこの領主、聞く限りでは良人だったようだが。一体何が起きているのか。

「ライアス、お前に勅命を下す。私の名において国境の地を探っ  
て来い」

「畏まりました」

ライアスの頭を垂れたその口が、確かに笑った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0772t/>

---

男装の令嬢

2011年10月7日13時06分発行